

丹波新地域ビジョン

—素案(未定稿)—

令和3年11月

丹波地域ビジョン委員会

兵庫県丹波県民局

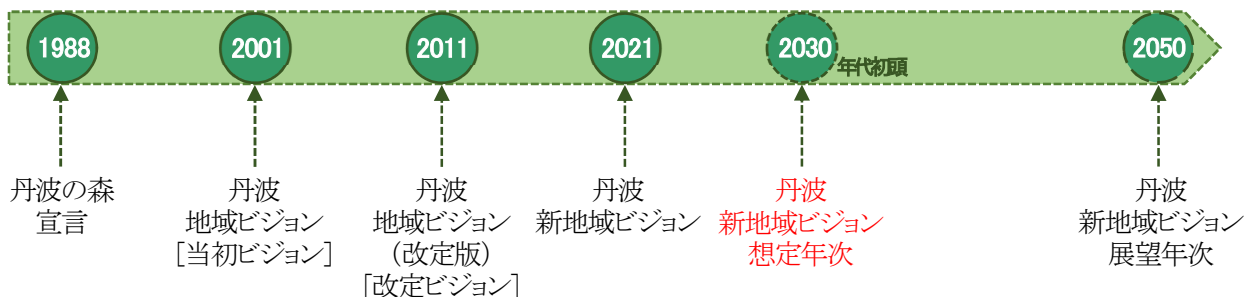
目 次

I はじめに	2
1. 新ビジョンの役割・性格	2
2. 新ビジョンの構成	3
II わたしたちの丹波―風土・文化、ポテンシャル	4
III 丹波の森づくりのこれまでとこれから―継承と発展	7
1. 丹波の森づくりの理念、成果	7
2. 地域ビジョンの評価検証	9
3. これからの森づくりに向けて	11
IV 2050年の丹波を描く―望ましい地域の姿	12
1. めざすべき地域社会の姿―基本理念	12
2. 2050年の地域社会像	14
V 2050年に向けた長期変化―リスクと可能性	18
1. 長期的な人口減少・高齢化	18
2. 環境制約・資源制約の深刻化	19
3. 超スマート社会の到来	21
4. 人々の意識変化	22
VI 将来像実現に向けたシナリオ・方向性	24
1. 空間像―生活空間の再編／創造	24
1-1 森の保全と活用―守り、活かす	24
1-2 集落、まちの創生―居心地のよい「場」の創出	26
2. 社会経済像―新しい経済・雇用の仕組み創出	29
2-1 新しい産業、事業が生まれ続ける価値創発の風土づくり	29
2-2 柔軟な働き方が可能な社会の形成	34
3. 人間像―新たな人材、つながり、コミュニティの出現	37
3-1 創造的人材の育成・活用と地域文化力の向上	37
3-2 人と人のつながり拡大と新たなコミュニティ形成	40
VII 推進の体制・枠組	44

I はじめに

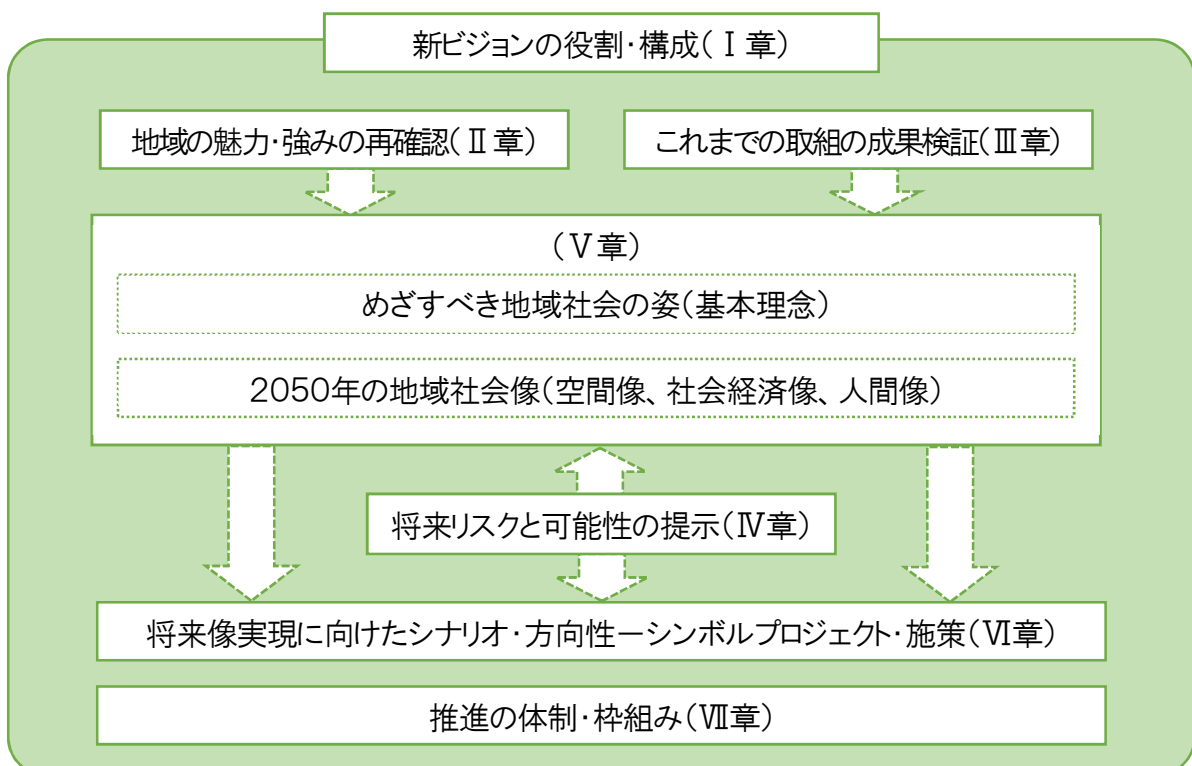
1 新ビジョンの役割・性格

- 「丹波新地域ビジョン」（以下新地域ビジョン）は、「丹波地域ビジョン」※が 2020 年に終了するのに伴い、その後継ビジョンとして策定されるものです
※この冊子では、2001（平成 13）年策定の「丹波地域ビジョン」を「当初ビジョン」、2011（平成 23 年）年改定の「丹波地域ビジョン改定版」を「改定ビジョン」と記しています。両者を指す場合は「地域ビジョン」と記載します
- 新ビジョンは、2050 年を展望して望ましい地域の将来像、ビジョンを描くとともに、**2030 年代初頭を想定年次として**、ビジョンの実現に向けた道筋、シナリオを示しています
- 新ビジョンは、丹波地域の住民、地域団体、事業者、行政をはじめ、地域のすべての個人・団体間で共有されるものです。その実現に向けた取り組みも、参画と協働の理念のもと、すべての主体とともに進めていきます。
- 丹波地域に親しみや愛着をもつ地域外の人々（交流人口・関係人口）にも、新ビジョンの実現に向け、活動の担い手になるよう呼びかけていきます
- 新ビジョンは、これまでの丹波の地域づくり（丹波の森づくり※）や「丹波地域ビジョン」の取り組みを発展的に継承していきます
※丹波の自然と文化の維持・発展に向けた取組を「丹波の森づくり」と呼んでいます。「丹波の森宣言」（1988（昭和 63）年 9 月 1 日）にはじまるその歴史は、30 年以上に及びます（Ⅲ-1 参照）
- 今日、多くの方が地域の変化の必要性を認識しています。新ビジョンでは、地域ビジョンの「成長しつづけるビジョン」の考え方を受け継ぎ、『**挑戦・成長**』をキーワードに、時代の変化に柔軟に対応し、新たな取組を生み出し続けていくビジョンとします
- 新ビジョンは、『**未来志向**』のビジョンです
 - － 挑戦的な目標を設定し、そこから遡って、近未来（ポストコロナ社会）、現在になすべきことを考えていきます
 - － 昔から残る丹波の森、風景や農の営みなどを未来に引き継ぐ一方で、地域資源、人材、絆など地域の強みを活かし、将来の可能性を積極的に追求していきます



2 新ビジョンの構成

- 「I はじめに」でビジョンの役割・性格、構成を示したのち、「II わたしたちの丹波ー風土・文化、ポテンシャル」で丹波の多彩な魅力を紹介しています
- 続く「III 丹波の森づくりのこれまでとこれからー継承と発展ー」では、丹波の森づくりの基本概念（森・もりびと）を再確認したうえで、森づくりの成果・レガシーを検証しています。次いで、「地域ビジョン改定版」の将来像の達成状況を評価検証したのち、取組の継承・発展に向けての考え方を明らかにしています
- 「IV 2050年の地域社会像ー望ましい地域の姿ー」では、めざすべき地域社会の基本理念を明らかにするとともに、将来像を描くうえでの基本的視点を明示しています。そしてそれらを踏まえて、空間像、経済社会像、人間像の3つの角度から2050年の地域社会の姿を描いています
- 「V 2050年に向けた環境変化」では、IV章、VI章の背景理解を深める目的で、人口減少・高齢化、環境・資源制約、超スマート社会、人々の意識変化という4つのテーマについて、将来展望と地域社会の対応方向を記しています。
- 「VI 将来像実現に向けたシナリオ」では、将来像の実現に向けたシナリオとして、概ね向こう10年間（2030年代初頭まで）の施策展開の基本方針を示しています。そのうえで、「シンボルプロジェクト」をはじめとする5年間の取組・事業を提示しています。「VI シンボルプロジェクト」において同事業の概要を記しています
- 「VII 推進の体制・枠組」では、新ビジョンの推進に向け、内外の組織・人材をゆるやかにつなぐネットワークの形成などをうたっています。



II わたしたちの丹波—風土・文化、ポテンシャル

- ◇ わたしたちの丹波は、緑豊かな山々に囲まれ、古来より「森」の恵みを受けつつ、「農」を土台に発展してきた多自然地域です。ここでは、今も日本の伝統的な暮らしや原風景に出会うことができます。
- ◇ 丹波は独自の地勢や歴史・伝統文化等を背景として、多彩な固有の魅力を放っている地域でもあります。丹波の将来を考えるにあたっては、まずこの風土・文化の魅力、ポテンシャルを再確認する必要があります。以下では、その主な特徴を記しています

[地勢・地質]

- 盆地内にのどかに広がる田園地帯と、それを抱くように連なる比高※ 600m 余の山々によって、丹波では四季折々の変化に富んだ景観が創りだされています

※山頂と盆地の底といったような、ある地域内における二地点間の高さの差

- 本州一標高の低い中央分水界（水切れ）を中心として、瀬戸内海側と日本海側の風が会い、生き物が行き交う低地帯「氷上回廊」が形成されています。この回廊があることで、特色ある気候・風土が生み出されてきました
- 1億年以上前の前期白亜紀の地層である篠山層群では、丹波竜などの恐竜類や世界最小の恐竜の卵など、世界的にも貴重な化石の発見が相次いでいます。篠山層群の上には田園地帯が広がり、「農村風景と恐竜が共存する」世界的にも希な地域となっています



多紀連山の山並み



氷上回廊位置図



丹波竜モニュメント(川代公園)



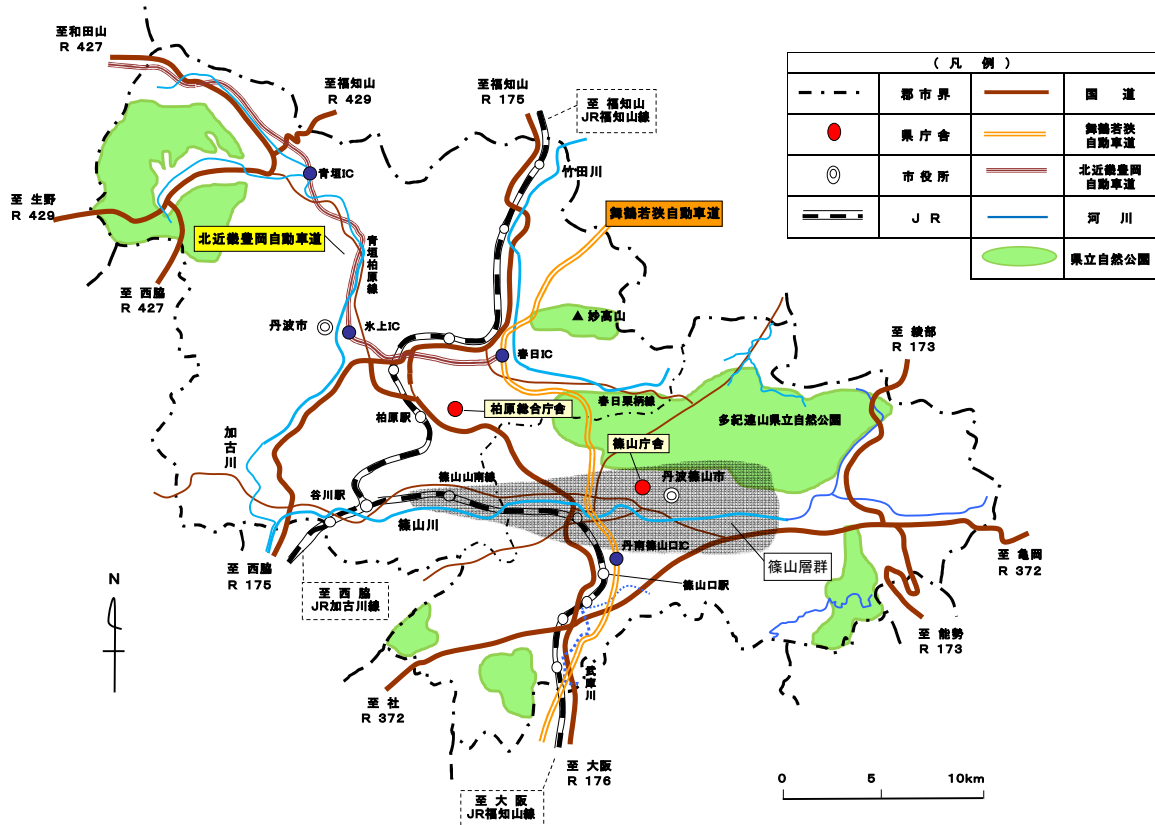
里山体験活動



クリンソウ群落(妙高山)

[共生]

- 丹波は約 75%が森林で覆われている「森の国」です。どこにいても身近に里山があり、自然とのふれあいを楽しむことができます
- 加古川、由良川、武庫川の源流域に位置する丹波は、「源流の里」とも呼ばれています。丹波の森林から湧き出る水が、**下流域や海に豊かさをもたらしています。一方、丹波の源流域には、ホトケドジョウ、バイカモ、クリンソウなどの貴重種が生息する豊かな自然環境が今もなお残されています。**
- 低地地帯「氷上回廊」の存在により、丹波は生物多様性に富んだ地域になっています。南方系(瀬戸内海側)と北方系(日本海側)の魚が同じ河川に共存し、南国と雪国の植物が混在して生息しています。



丹波地域管内図

[豊饒]

- 盆地特有の気候（寒暖差、丹波霧など）のもと、深い栄養を蓄えた粘土質の土壌、澄んだ空気と清らかな水に恵まれた丹波は、古来より豊饒の地として知られてきました。丹波霧が象徴する昼夜の寒暖の差は作物の生育に絶好の条件を生み出しています
- この豊饒の地であることによって、丹波三宝として全国的に名高い丹波栗、丹波大納言小豆、丹波黒大豆をはじめ、粘りと甘みのある米、山の芋、猪肉（ぼたん鍋）、鹿肉、有機野菜など、丹波は今日多彩な産物を誇っています。2021年には「丹波篠山の黒大豆栽培」が日本農業遺産に認定され、300年前から続く持続的な農業が高く評価されることになりました
- 地域の人がふるさと丹波で思い浮かべるものとして、こうした産物の味覚をあげています。それは、人々の心の中でふるさとの重要な構成要素となっています。



古来よりのブランド 丹波栗



丹波大納言小豆



日本農業遺産 丹波黒大豆

[伝統]

- 豊かな民俗文化が今も残るのが丹波です。秋祭に笛を響かせ太鼓を鳴らす田楽踊りは、室町時代に都から伝えられたものです。一方、この地で興った丹波猿楽が当時都で流行した能



伝統料理 ぼたん鍋

楽（猿楽）のルーツとなりました

- 江戸時代の民謡を起源とするデカンシヨ節は、時代ごとの風土や人情などを読み込んで歌い継がれ、郷土への愛情を育んできました。2015年には日本遺産に認定され、地域固有の文化としてデカンシヨ節の魅力が改めて発信されつつあります
- 平安時代末期が起源といわれる丹波焼は、日本六古窯の一つとして、2017年日本遺産に認定され、産地は再び活気づいています。江戸時代からその技が受け継がれてきた丹波布、丹波木綿も、近年その価値が見直されつつあります
- 城下町（丹波篠山市市街地、丹波市柏原町）や宿場町（丹波篠山市福住地区）では、歴史的建造物が保全され、伝統的なまちの佇まいが今も残されています。山裾や川沿いに点在する農村集落には茅葺き民家や白壁の土蔵が残り、日本の原風景を今に伝えています

[交流]

- かつて丹波は山陰道や京街道などの街道筋として栄え、都や諸国との間で文物の交流が盛んでした。古代には、山陰道を通って都の使いが地方に赴き、丹波からは野の幸、山の幸が都へ届けられていました。加古川、竹田川の舟運によっても、瀬戸内海、日本海の両側から多くの人、ものが運ばれてきました
- 交流は、現代の丹波を特色づけているキーワードでもあります。高度成長期以降半世紀以上にわたり、阪神地域と丹波地域の間で地域間交流が続いています。野外教育施設「丹波少年自然の家」では、自然学校にやってきた阪神間の子どもたちが地元の人々と交流し、大学のサテライト拠点では多くの大学生が地域貢献活動に取り組んでいます。

[気質]

- 丹波には温かい人、温厚な気質の人が多くといわれています（丹波という言葉には“ほっこりとした”イメージがあると指摘する人もいます）。そうした気質が移住者など外部の者を受け入れる「寛容性」に富んだ風土を生んでいるとの声もあります
- 今もなお、集落単位や地区単位（明治時代の旧村などが前身）の絆が強く、自治意識が高いのが、丹波の人々です。それぞれの集落が自立し共存しようとしている、いわば「集落共和国」として存立しているのが、丹波なのです



デカンシヨ節(日本遺産)



日本六古窯 丹波焼(日本遺産)



河原町妻入商家群(丹波篠山市)



昔ながらの農村・田園風景



川遊びに興じる子どもたち
(丹波少年自然の家:丹波市青垣)



学生によるライトアップイベント(丹波市柏原)



三気の郷の方々(丹波市春日)

III 丹波の森づくりのこれまでとこれから — 継承と発展 —

- ◇ 丹波では、「丹波の森宣言」(昭和63年9月1日)以降、30年以上にわたって、「丹波の森づくり」と呼ばれる特色ある地域づくりが行なわれてきました
- ◇ 自然との共生を謳い、かつては先導的であった森づくりの理念は、今日では普遍的なものになりつつあります。その理念は、SDGs(持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals)の考え方とも軌を一にしています。また、ふるさとづくりを進めるその考え方は、現在の地域創生の考え方を先取りしたものともいえます
- ◇ 以下では、この地域の財産ともいえる丹波の森づくりの理念と活動内容を再確認するとともに、それに基づき推進してきた地域ビジョンの評価検証を行なっています

1 丹波の森づくりの理念、活動

1-1 「丹波の森」、「もりびと」とは

- 丹波の森は幅広い概念です。『私たちを取り巻くすべての環境』が「丹波の森」として理解されています

『森』 = 森林、田園、集落、まちを含む空間全域
= 人、生き物全ての営み(丹波の風土・文化、生業)
= 人々の結びつき、ネットワーク



※この新ビジョンでは、「森」と表記するときは「丹波の森」を意味しています。通常の森は森林と記しています。

- 丹波の森づくりとは、『人と自然と文化の調和した地域づくり』であり、『みんなの共通のふるさとを創っていこう』とする試みです。地域住民だけでなく、丹波を愛するすべての人のためのふるさとづくりです

『ふるさと丹波のかけがえのない美しい自然はもちろん、暮らしやなりわい、地域内外の人々との交流、生活空間、生活文化など、私たちを取り巻くすべての環境を「丹波の森」と考え、より良い地域づくりに取り組んできました』(丹波地域ビジョン・丹波の森構想)

『「丹波の森がどこにあるのか?」とよく聞かれます。「鎮守の森」のように思っているわけです。「これが丹波の森です」というのではなく、丹波全体が一つの森に囲まれた、一つのユートピア、丹波に住んでいる人にも暮らしやすいし、外から来ても楽しいところだというみんなの共通のふるさとを創っていこう、これが丹波の森構想だと思います。』(河合雅雄先生:丹波の森大学講義録『自然と人間』)

- 丹波の森づくりの担い手は「もりびと」と呼ばれています。それは森を愛し、森を守るひとたちの総称です。
- 地域ビジョンではもりびとを「森の市民」と表現し、『地域内外を問わず、丹波地域に誇りと愛着を持ち、丹波の地域づくりに責任を持って行動する自律した人々」と規定しています。

- 「もりびと」(森の市民)は、自然・風土・文化等の地域の資源を守り、活用し新しい地域づくりを進めていく人たちであり、**伝統を守りながらも未来社会を切り拓く活動的、能動的な人材**として期待されています

1-2 丹波の森づくりの成果とこれから

(1) 丹波の森づくりの推進状況

- 以下では、「丹波の森宣言」に沿って丹波の森づくりの取組の推進状況を示しています

宣言1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

→ 森林の管理をはじめとして丹波らしい土地利用が進むとともに、里山や水辺環境の再生に向けた取組が進展しています。農地・農業の保全に向け仕組みづくり、担い手の育成が行なわれています。野生動植物との共生に向けた活動(希少動植物の保護等)も活発になっています **里山づくり活動**▶



宣言2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます

→ 丹波らしい景観の保全・形成が進んでいます。自然を体感できる場・空間(丹波の森公苑、丹波並木道公園等)が生まれ、景観ネットワークが形成されています(ふるさと桜づつみ回廊、たんば三街道)。まち全体を花で彩る活動も市民、地域主体で進んでいます。 **清里 コスモス(丹波市氷上)**▶



宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます

→ 歴史的景観・建造物や文化遺産(日本遺産等)の保全・活用が進むとともに、自然遺産である恐竜化石を活かした地域づくりが進展しています。丹波ならではの特色ある芸術・文化の振興(県立陶芸館、シューベルティアアーデたんば)も図られています **まちかどコンサート(シューベルティアアーデたんば)**▶



宣言4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

→ もりびとが育ち、様々な分野で活躍しています。域内外の交流が活発になり、移住・環流、起業が拡大し丹波製品のブランド化も試みられています。体験学習、ふるさと教育・食育の推進などにより、丹波の誇り(シビック・プライド)の醸成が図られています **子どもたちの自然体験学習(たんば縄文塾)**▶



(2) 丹波の森づくりの新たな展開—持続可能な地域づくりの推進—

- 丹波の森づくりでは、その活動を SDGs の実現に向けたローカル・アクションと位置づけ、環境、経済、社会の各側面から持続可能な地域づくりを推進していくことが期待されています

- 丹波の森づくりでは、SDGsの実現に向け、共通の課題を抱える国内外の地域や人々と交流・連携し、課題の解決を図ることも必要です。「開かれた地域づくり」がこれからもその基本理念であり続けます。
- また今後、SDGs（目標年次：2030年）を越え、30年先、50年先を見据え、世代をまたぐ超長期の取組（自然の再生、人づくりなど）を進めることも、丹波の森づくりに課せられた役割です



(注) 丹波の森づくりに関わる他のSDGsの目標もあります

丹波の森づくりによるSDGsの推進

2 地域ビジョンの評価検証

2-1 対象・方法

- 改定ビジョン（2011年度策定：目標年次：2020年）では、5つの将来像（『自立』、『交流』、『元気』、『絆』、『安全・安心』）を掲げています（改定ビジョンでは、当初ビジョンの将来像の基本的方向を継承していますが、内容・表現については見直しています）
- 策定後、5つの将来像の達成状況を把握するため、将来像に関連する指標（客観指標74項目、主観指標54項目等）を設定し、毎年度フォローアップに努めてきました
- 新ビジョンの策定過程では、「丹波新ビジョン検討委員会」での議論のほか、「ビジョンを語る会」、「丹波地域夢会議」等の開催や「丹波地域の今とこれからのに関するアンケート」の実施などを通じて、将来像の実現状況について、丹波地域内外の方から多数ご意見を伺いました

2-2 検証結果

(1) 将来像の達成状況

- 上記の策定過程で集めたデータや意見にもとづき、以下に示すように、5つの将来像の達成状況の検証を行いました（詳細な検証結果は『別冊』参照）

地域ビジョン将来像の検証結果

<p>みんなで創る 自立 のたんば</p>	<p>⇒高い地域活動への参加率からみて、“自立”意識が高い地域といえるが、人口減少下で地域力の維持・向上をめざすには、移住者や関係人口をはじめ様々な人が参加する新たなネットワークの構築が今後重要になる</p>
	<p>■「主体的に地域課題の解決に活動する地域だと思ふ人の割合」 57% (R3)</p>
<p>都会に近い 田舎を楽しむ 交流 のたんば</p>	<p>⇒交流人口、移住者数とも増加傾向にあるが、誇りを持って「帰ってこい」といえる地域だと思ふ人はまだ少数にとどまっている。地域のポテンシャルを考えると、今後、環境を整備すれば、交流、移住はさらに拡大していく可能性がある</p>
	<p>■「移住者(地域の方)と交流のある人の割合」 56% (R3)</p>
<p>やりがいを感じ 実感できる 元気 なたんば</p>	<p>⇒地域経済は概ね堅調に推移しているが、地域に活力があるとは認識されていない。新たな活力創出には、農林業、観光等の外貨獲得産業の拡大とその富(所得)の域内循環が鍵になる。時間や場所にとられない働き方が浸透するなか、各人のやりがいを満たす多様なしごとの創出も課題となる</p>
	<p>◆「住んでいるまちや地元企業に活気があると思ふ人の割合」 21.6% (R3)</p>
<p>多世代が 支え合う 絆 のたんば</p>	<p>⇒近隣や多世代間での絆の強い地域である。この10年で生活の利便性が良くなったと思ふ人は増えているが、さらに暮らしやすい地域するには、生活・子育て支援サービスの一層の充実が求められている。高齢者をはじめ各人が如何なく能力を発揮できるよう、様々なしごとや学びの場の創出に取り組んでいく必要がある</p>
	<p>■「地域との関わりを今よりも深めたいと思っている人の割合」 56% (R3)</p>
<p>ともに暮らす 安全安心 なたんば</p>	<p>⇒犯罪・交通事故の減少や健康・地域医療への安心感の高まりなどから、総合的にみて、安全・安心な地域社会づくりは進んでいるといえるが、ユニバーサル社会の実現という点では、評価は高くない。誰もが暮らしやすい地域にするには、一人ひとりに寄り添ったきめ細かな支援や交通等の基盤整備が必要になる</p>
	<p>◆「治安が良く安心して暮らせると思ふ人の割合」 85% (R3)</p>

(注) ■は「丹波地域の今とこれからのに関するアンケート」、◆は「県民意識調査」。思う(思っている)人の割合は、「思う」、「そう思う」と回答した人の合計

(2) 検証結果まとめ

- 以上の検証結果から、地域ビジョンの将来像の実現に向け、この10年間一定程度進展があったことがうかがえます。
- しかし一方では、人材育成(「自立」)、まちの活力(「元気」)、子育て環境、高齢者の暮らしやすさ(「絆」)など、個々の課題も浮き彫りになりました。
- また、地域づくり(丹波の森づくり)が進展した反面、人口減少・高齢化のなかで、コミュニティ機能の低下が懸念されています
- 新ビジョンでは、地域ビジョンで成果を上げてきた取組を発展的に継承するとともに、課題の解決に向け、新たな取組の検討にあたります

3 これからの森づくりに向けて

- 丹波の森づくりは、制度の整備、担い手の形成、ネットワークの構築、拠点の形成、特色ある活動の展開、市民精神の広がり、ふるさと意識の醸成などの点で成果がみられました。この基盤・成果を活かしつつ、これからの地域づくりを進める必要があります
- 地域ビジョンのもとで、丹波の森づくりは里山づくりから景観形成、文化振興、賑わいづくり、人材育成まで、様々な分野に広がってきました。この活動の広がりが評価される一方で、活動の多様化に伴い森づくりのエネルギーが拡散してしまったと見る向きもあります。また、若い世代を中心に森づくり自体知らない人も増えてきています(『別冊』参照)。今一度、原点である理念に立ち返り、運動としての森づくりの気運を高めていくことが必要となっています。
- 丹波の森づくりの理念(『人と自然と文化の調和した地域づくり』)やそれを踏まえた地域ビジョンの基本理念(『3つの環-自然、人、産業の環』※)は、今の時代においても尊重すべき考え方です。むしろ、人口制約、環境制約により持続可能な社会への転換がより差し迫った課題である今日のほうが、その理念に立ち返って物事を考える必要があるとあってよいでしょう。
 - ※『丹波のいのち(=自然)、ひと(=人間)、なりわい(=産業)の3つの環をはぐくむ(「守り」「育て」「活かす」)(当初ビジョン)
 - 『いのちをはぐくむ・自然の「環」』は自然との共生、いのちの循環の促進、『ひとをはぐくむ・人間の「環」』は人のつながりの拡大、『なりわいをはぐくむ・産業の「環」』は産業間の連携拡大をめざすものです
- 一方、地域社会に目を向けると、地域(森)づくりが進展するなかでも、人口減少・高齢化に伴いコミュニティ機能の維持が年々難しくなりつつあります。このため、これまでの習慣や枠組みにとらわれず、時代に即した新しいコミュニティのあり方を模索していく必要があります。地域住民とともに、地域に愛着、関心のある様々な人にも、コミュニティの担い手として活躍してもらおう新たな仕組みを整えていくことが重要になっています
- こうした検討にもとづき、新ビジョンを丹波の森づくりの「**継承と進化**」をめざすものと位置づけます。すなわち、新ビジョンは丹波の森づくりや地域ビジョンの理念を継承し次の世代につなぐものであるとともに、それがめざす持続可能な社会の実現に向け、時代の変化に対応した新たな取組を進めるものであります

IV 2050年の丹波を描く—望ましい地域社会の姿—

- ◇ 地域のポテンシャルやこれまでの地域づくりの成果を踏まえつつ、将来社会の潮流変化（V章）を見据え、2050年の丹波の望ましい地域社会の姿を描いています。
- ◇ さらに空間像、社会経済像、人間像の観点からその姿をより具体的に示しています

1 めざすべき将来の姿—基本理念—

基本理念

人と技術の力を活かした、自然の中での多彩な暮らしのカタチの創造・発信
—「人」を創り、「森」を（守り）活かし、新たな「価値」共創に挑む—

- 「暮らしのカタチ」とは、2050年に到来する社会（脱炭素社会、超スマート社会等）のもとでの最適（快適）な暮らし方です。その創造・発信を基本理念に掲げます。
- 暮らしのカタチは決して画一的なものではなく、丹波に関わる一人ひとりが、夢の実現に向け自分らしい暮らし方、住まい方、働き方を選択することで多彩なものになっていきます。2050年の丹波は、豊かな住環境とともに、「全ての人を温かく包み込む、開かれた地」、「多様な機会と選択肢に恵まれた約束の地」であることをアピールし、多くの人を受け入れ、多彩な暮らしのカタチを創りだしています。
- 2050年には「人」の力というものが、今以上に問われます。AIやロボットが普及するなかで、人は創造的な活動に従事する時間が増え、すべての人が創造的人材であることを期待されます。人の創造力・想像力が地域を変える源となります。人が最大の資源であり、人材育成や新たな人材の流入、人的交流の拡大が大切になります。
- 2050年、「技術」が人口減少や環境制約の克服、生産性の向上に大きく貢献する可能性があります。地域に見合った技術を能動的に選択し、暮らしやすい地域社会を実現するとともに、デジタル技術等を活用して新しい産業を興し、個々人のニーズに応じた新しいサービスを生み出していくことが期待されています。自然との共生を人の知恵とともに技術の力を使って進めることも重要です
- 丹波の「森」は守るべき存在であるとともに、暮らしを豊かにするために活用すべき貴重な資源です。その賢明な利用（循環利用）によって、環境問題を解決するだけでなく、農、食等を中心とする持続可能な産業構造の構築（環境・社会・経済の好循環）や食、エネルギーの安定的確保（自給率向上）などが可能になります
- 2050年の丹波では、多彩な「価値」、「魅力」が生み出されています。技術革新がもたらす生活の利便性、快適性の向上につながる価値や、「森」の資源を活かし磨き直すことで生まれる、世界の中で、丹波でしか体験できないオンリーワンの魅力（固有価値）が創出されています。それによって、丹波を訪れたい人、住みたい人、丹波と関わりたい

い人、丹波でチャレンジしたい人が将来にわたって増えていくことが、われわれの願いです

- 世界に通じる普遍的価値の創造もわれわれの目標です。SDGsの達成や超スマート社会への対応など、世界が共有する課題の解決に向け、丹波スタイル、すなわち「人と技術の力を活かした、自然の中での多彩な暮らしのカタチ」（＝持続可能な自律分散型居住モデル）の創造・発信に挑戦します。「丹波の森」は、「未来社会の暮らしの実験場」となり、新たな価値を生み出していきます。
- こうした新たな価値は、内外の多様な人々が結びつくことで生まれてきます。目標を共有（共感）する人たちが、ともに学び、ともに成長し、ともに創る「共創」の営み、プロセスが重要になります。「丹波の森」には、持続可能な社会の実現や暮らしの向上につながる価値創造に挑む多彩な共創ネットワーク・コミュニティが出現しています

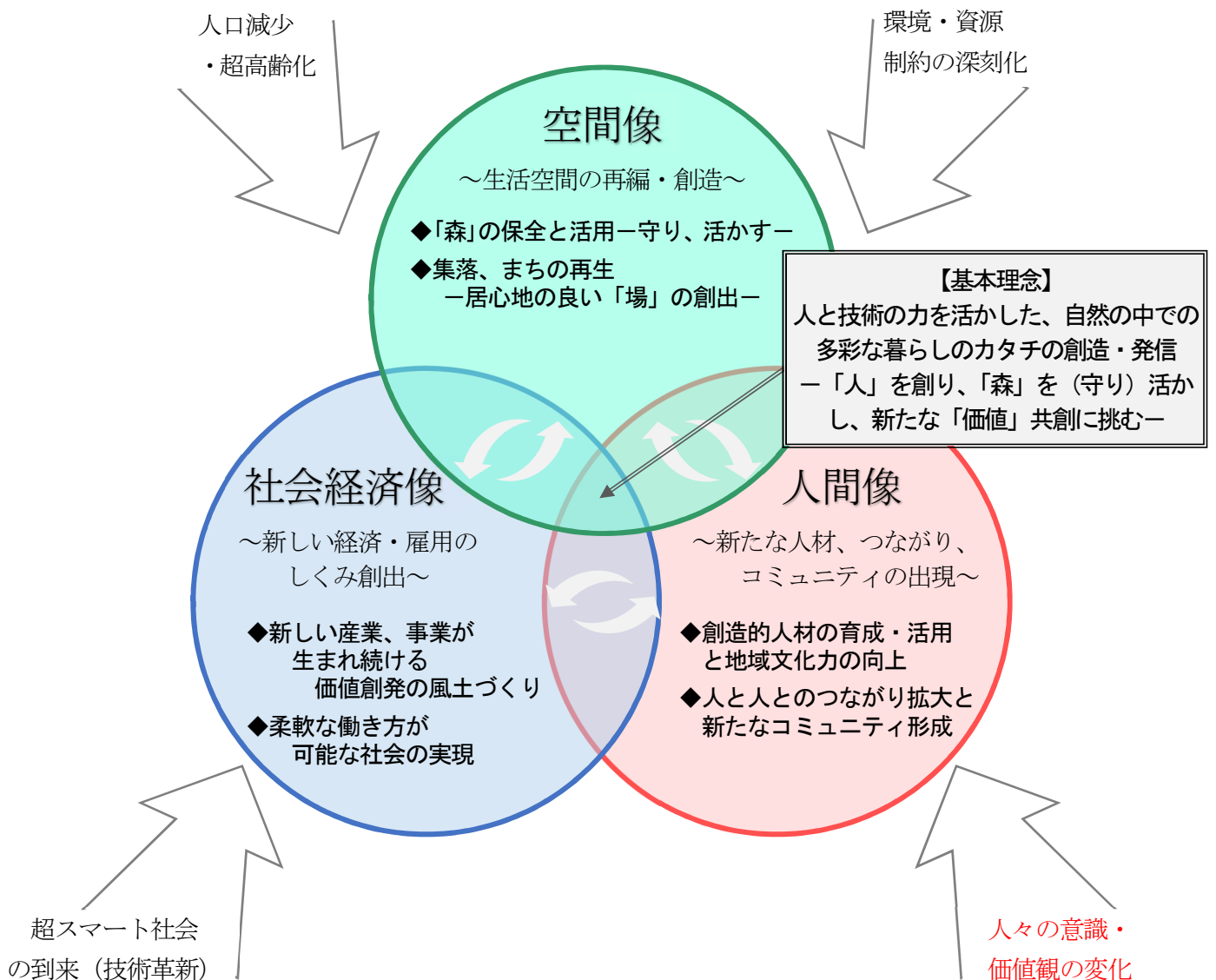


図 新地域ビジョンの基本理念・地域社会像

2 2050年の地域社会像

- ◇ 基本理念を踏まえつつ、2050年の地域社会像を空間像、社会経済像、人間像の観点から具体的に示しています。

2-1 空間像—生活空間の再編・創造—

◆ 「森」の保全と活用—守り、活かす—

- ・丹波固有の環境・景観は変わることなく、未来へと受け継がれている一方で、空間の効率的な管理、有効活用が進みます

◆ 集落、まちの創生—居心地の良い「場」の創出—

- ・新しい時代の暮らし方、住まい方、働き方に適した空間として、集落、まちは変化していきます

- 100年前と変わらない、多様な生き物が棲む豊かな森が残っています。憩いの場や暮らしの場としての森、里山の利用が拡大しています
- 森は生業・生産の場（資源、エネルギー源）として再生しています。麓の集落では、木質バイオマスによるエネルギー自給率100%を達成しています
- 河川では、安全や維持管理に配慮しつつ、自然を生かした整備が進んでいます。水辺には子どもたちが水遊びを楽しめる空間や、生き物が生息しやすい瀬や淵など多様性に富んだ環境が育まれています
- 集落では、共有化（公有化）の進展とデジタル管理技術の導入で、家屋、土地やコミュニティのシンボル（神社仏閣、鎮守の森等）の保全が図られています。関係人口が集落に日常的に滞在し、地域の担い手として活動しています
- 集落のなかには、居住者がいなくても、農業生産施設やスポーツ・文化施設、まるごとホテル、ビジネスパークなどとして維持・活用されるところも出現し、まちに对人（有人）サービス機能が集約されています
- 集落、田畑、里山、水辺が保全され、日本の原風景的な丹波らしい景観がそのまま残り続けています
- まち（市街地）では歴史的建造物が大切に管理され、趣ある街並み景観がそのまま維持されています。その一方で、まちなかのそこかしこで古い施設・家屋が改修され、ふれあい・交流の場（まちの居場所）やオフィス、起業・創業拠点、創造的活動の空間等へと変身し、まちはかつての賑わいを取り戻しています
- まちと集落の二地域居住も進展しています。まちと周辺集落で1つの「自律分散型居住圏※」を形成しています

※自律分散型居住圏＝持続可能な生活を可能とする基本圏域（最小単位）。圏域の中心であるまちには交流拠点や日常生活サービス機能が備わっています。エネルギー自給や地産地消等の推進を図る基本単位でもあります

2-2 社会経済像—新しい経済・雇用のしくみ創出—

◆ 新しい産業、事業が生まれ続ける価値創発の風土づくり

- ・超スマート社会の到来とともに、新しい産業構造（エコシステム）が出現し、新たな製品・サービスが生まれています
- ・共有経済（シェアリング・エコノミー）が発展し、新たな地域経済循環が生まれています

◆ 柔軟な働き方が可能な社会の実現

- ・しごとのスタイルは大きく変わります。しごとと生活の境界がなくなり、各人のライフスタイルにあわせた柔軟な働き方が可能になります

- 地域産業、農林業、IT産業の融合、産官学民の連携により、地域発イノベーションを起こす新たな仕組み、ネットワークが形成され、起業・創業しやすい環境(エコシステム)が生まれています
- デジタル技術を活かし、地域資源を活用した新しい製品・サービス (MORITEC※)が開発され、**世界市場に提供されることで、新たな富(所得)を生み出されています**。地域で創り、産み出す「地創地産」(「地産地創」)の実践が図られています
※MORITEC=森、農、食、コミュニティの分野におけるDX(デジタル・トランスフォーメーション)の総称
- 食のバリューチェーン(食関連産業の集積・連携)が形成され、付加価値の高い商品・サービスの開発が進みます。丹波は食材の供給基地から新たな食ビジネス、食ツーリズム、食文化の創造・発信拠点へと転換していきます
- 多拠点居住の拡大やツーリズムの多様化(脱観光化)に伴い、訪問者・滞在者が増加し、ツーリズムが地域経済の主要産業の1つとしてさらなる成長を遂げます
- 生産・流通・サービス活動、空間管理の現場における無人化、省力化、自動化が進みます(無人農業、無人店舗、ロボット介護等)
- マルチワーク(兼業・副業)が基本になり、多くの人が多種多様な(有償・無償の)しごとの組み合わせにより自らのライフスタイルを創造するようになります
- 森、集落、まちの至る所にワークスペースが出現します。その日の気分や都合でどこでも働くことができるようになります
- **域外居住者でも、丹波を仕事場とする人が増えています。多くの人が週末滞在やリモートワーク等によって、丹波での起業や伝統産業の継業、創造活動等に挑んでいます**
- 共有経済(シェアリングエコノミー)のもと、空間、モノ、移動手段、人材(知識・スキル)等の共有化、相互利用が進展します。それにより、社会ストック、人材の有効活用や働き方の多様化が進むとともに、‘モノを持たない、お金をかけないリーズナブルな暮らし’が可能になります。デジタル通貨が共有経済の基軸通貨になります

2-3 人間像—新たな人材、つながり、コミュニティの出現—

◆ 創造的人材の育成・活用と地域文化力の向上

- ・自然と共生する暮らしが基本であり続ける一方で、多彩なライフスタイルが花開く場となります
- ・それが魅力となり、丹波を居住、活動の場を選択する創造的人材が増える一方で、体験、学習を通じて地域のなかから創造的人材が育っています

◆ 人と人とのつながり拡大と新たなコミュニティ出現

- ・丹波を愛し、丹波を支える人たちのネットワークが地域を越えて拡がり、丹波外に居ても、丹波の担い手になる人が増えています
- ・デジタル技術の活用や仕組みの革新により、より安心、便利に暮らせる生活環境や誰もが能力を発揮できる基盤が整備されたコミュニティが出現します

- 丹波ならではの自然とのふれあい、食の豊かさ、農の楽しみを享受しつつ、やりたい暮らし、しごとを実現し、個性的なライフスタイルを謳歌している人が増えています
- 年齢、性別、国籍、障がいの有無に関係なく、誰もが担い手（もりびと）となって地域社会のなかで自らの役割を見出すことができるようになります
- デジタル技術を駆使し、地域課題の解決や暮らしに役立つサービスの開発に挑むイノベーターとしての市民（もりびと）が輩出されます
- 100歳超のシニアがAI、ロボットの助けを借りて現場で活躍できるようになり、伝統技術の継承や担い手の育成も進んでいます
- 地域固有の文化を継承しつつも、創造的活動の場として、内外から多種多様な人々を招き入れることで、新しい文化の発信拠点へと発展します
- 世界の**英知**が丹波に結集し、多国籍チームで地域課題の解決にあたっています
- 自然学習、体験学習等を通じて、子どもたちが感性と知性のバランスのとれた創造力（想像力）豊かな人間へと成長し、創造的活動の担い手になっています。**地域コミュニティが創造的教育の場としての役割を果たしています**
- **eラーニングによって、子どもから大人まで、一人ひとりの関心・ニーズに応じた教育プログラムが提供され、今以上に主体的に学べる環境が生まれています。AIが家庭教師役となり、子どもたちは質の高い科学教育、情報教育を受けています**
- **地域コミュニティでは、地域の資源、産業、文化を介して、住民、訪問者、滞在者、利用者、所有者、出身者、支援者等の間に新しい地縁（絆）が幾重にも生まれています。その重層的なつながりがコミュニティを支えています。**
- 自治会・地域運営組織が仮想コミュニティ化し、関係人口（電子市民）の参画を得

ながら、地域自治・経営を進めています（デジタル・ガバナンスの推進）

- 地域情報のビッグデータ化と AI の導入により、個々人のニーズに寄り添った情報が配信されるようになり、災害時の避難も安全に行えます（情報のパーソナル化）
- 空の移動革命が現実のものとなります。丹波の空を「空飛ぶ車」が飛び交い、いつでも、どこでも行きたいところに行ける時代になります（移動のパーソナル化）
- デジタル技術を活用して、子育て、介護を地域社会全体で支える新たな共助の仕組みが構築され、必要な時に必要な人が使えるシェアリングエコノミーが進みます

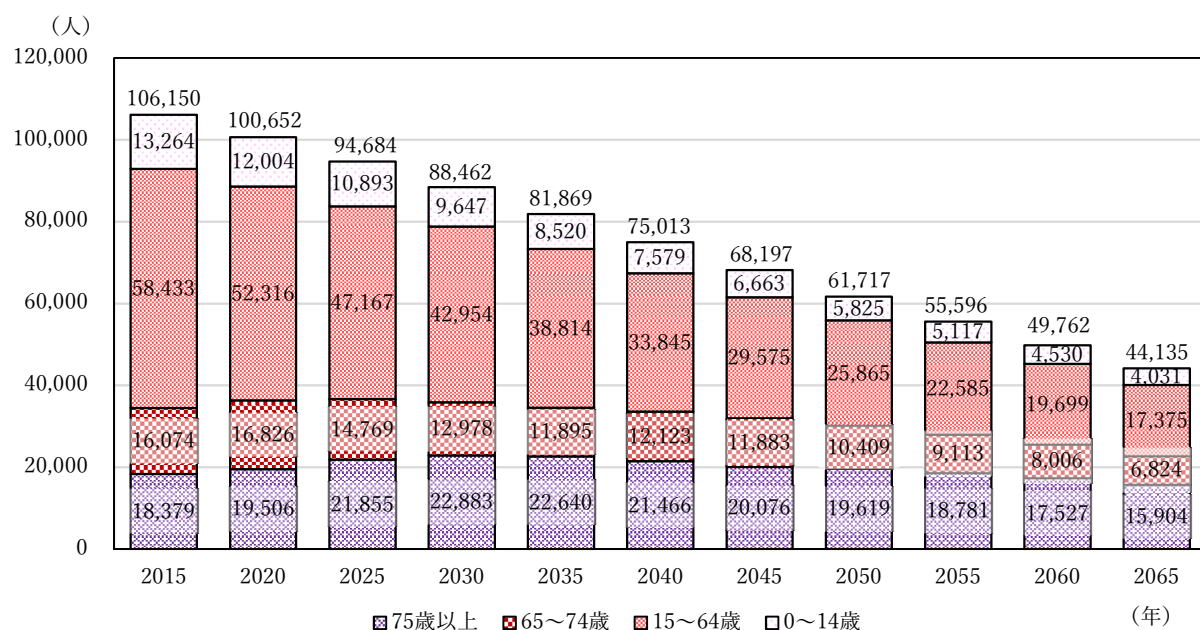
V 2050年に向けた環境変化

- ◇ 将来像を描くにあたっては、これからの社会の環境変化を踏まえる必要があります。そこで以下では、2050年に向けてのリスク要因となり得る人口減少・高齢化と環境・資源問題を取り上げるとともに、その解決要因になる可能性を秘めた超スマート社会（Society5.0）の到来について考えてみます

1 長期的な人口減少・高齢化

1-1 人口推移・推計

- 丹波地域は全国、兵庫県（平均）よりも速く、2005年に人口減少時代に突入しました（2005年人口（116,055人）は、明治初期（明治14年）の人口水準を下回りました（出典：国勢調査等）
- その後人口減少は加速化し、丹波地域の2020年人口は101,148人（国勢調査速報値）にまで減少しました。2000年、2010年と比べて、それぞれ8.9%、4.7%の減少です
- 2050年の人口は、2020年人口（101,148人）から40%近く減少し、6万人台にまで低下することが予測されています（兵庫県人口シミュレーション）。これは、江戸時代中期以前の人口水準に相当します
- 丹波の高齢化率（65歳以上の人口割合）は2050年には50%近くにまで上昇すると予測されています。それとともに、後期高齢者（75歳以上）の人口割合は、概ね2020年の高齢化率（65歳以上）に相当する30%台前半にまで上昇します
- 一方、子ども（0~14歳）も、生産年齢人口（15~64歳）も、2050年に現在の半分以下の水準にまで低下すると予測されています



※2015年は国勢調査、2020年は国勢調査（速報値）ではなく推計人口（出典：兵庫県将来推計人口）

図 丹波地域の年代別人口予測（2015年～2065年）

1-2 人口減少社会への対応

- 地域の持続的発展には、人口数の維持（人口減少数の抑制）よりも、むしろ「地域活動総量」の拡大を重視していく必要があります。すなわち、現実・仮想空間での人の接触・交流、情報、モノ、カネの流通・循環の促進が発展の鍵となります
- 地域活動総量を拡大するには、一人ひとりが多彩な活動（マルチワーク）を担う社会や健康寿命の延伸により、いつまでも元気に活躍し続ける社会の実現をめざす必要があります
- また、定住人口だけでなく、関係人口のなかにも地域の担い手を求めていく必要があります。そのためには、開かれた地域社会の形成が重要な課題となります
- 人手をかけずとも持続可能な地域のあり方を考えることも重要です。デジタル技術の活用による空間管理の省力化、無人化や仕組み・制度の刷新による集落運営の効率化などが期待されます
- 長期的な傾向として人口減少は免れ得ないものですが、近年、都市住民、特に若者の間で地方での生活を望む「田園回帰」志向が強まっています。実際、コロナ禍以降大都市から地方への新たな人口移動を起しています。丹波地域でも移住者の数は増加傾向にあります。この傾向が定着すれば、現在の推計よりも人口減少を抑制できる可能性があります

2 環境制約・資源制約の深刻化

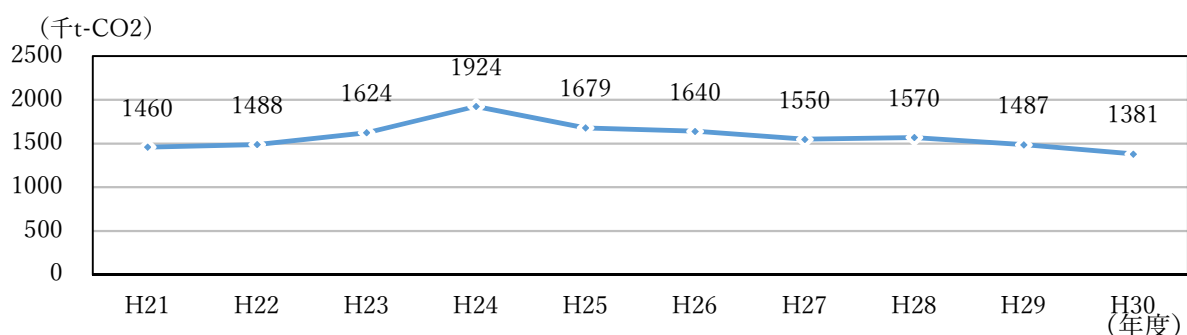
2-1 予想される将来リスク

- 2050 年頃までに二酸化炭素と他の温室効果ガス排出量を大幅に削減し、ネットゼロにしない限り、21 世紀中に世界の気温は 2 度以上上昇すると予測されています。これを受け、我が国でも 2050 年までの脱炭素化（カーボンニュートラル）を宣言し、脱炭素に向けた持続可能な地域づくりの推進を図ろうとしています
- 地球温暖化（気候変動）の影響等を受け、今後数十年の間に世界で推計 100 万種の生物が絶滅する恐れがあるといわれています。生物多様性は地域の自然社会条件に依存することから、地域自らその保全に取り組むことが重要になっています。
- 中長期的に、世界の経済発展に伴う資源の需要増等により、化石燃料や原材料資源の枯渇が予測されています。これまでのように経済発展に比例して資源利用を増やすことが許されなくなりつつあり、資源効率性の高い経済システム（適量生産・適量購入・循環利用）への転換が求められています
- 食糧に関しても、途上国での人口爆発、気候変動、水資源制約等を背景に、将来需給の逼迫が予測されています。地産地消の推進や食品ロスの削減に向けた取組がこれまでに増して重要になりつつあります

2-2 ローカル・アクションの方向性

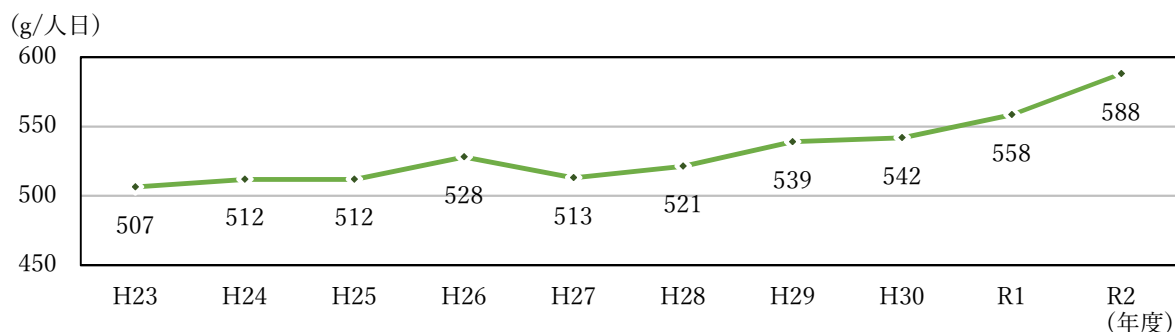
- 丹波の森づくりや SDGs の理念に沿って、森、里山、河川・ため池などを守り、活かすことで、将来にわたって、自然（生き物）と共生する暮らしが可能な地域社会であり続けることを求められています

- 環境負荷をかけない地域社会の発展方策や暮らしの質（QOL）向上の途を探る必要があります。丹波地域における温室効果ガス排出量は低下傾向（図参照）にあります。温暖化によるさらなる気温上昇は、将来丹波特有の気候・土壌に影響を及ぼすかもしれません。ゼロカーボン社会の実現に向け、低炭素住宅の導入や電動車の普及促進等、暮らしの快適性・利便性の向上にもつながる低炭素化の取組を推進する必要があります
- 食の豊かさを誇る丹波です。地産地消をさらに拡大し、食糧供給、食の安全・安心の確保を図るとともに、食品廃棄物の再生利用（飼料化・肥料化・メタン化）やフードマイレージの低減化を進めていくことが期待されています
- 家庭用ゴミの排出量は近年増加傾向（図参照）にある丹波地域では、廃棄物削減も将来に向け大きな課題です。廃棄物ゼロ社会の実現に向けて、循環型ライフスタイルへの転換を促進する必要があります
- 資源利用の最適化に向けては、地域資源を共有し、その相互利用を促進する共有経済（シェアリング・エコノミー）や持続可能な形で地域資源を循環利用する循環経済（サーキュラー・エコノミー）の確立が重要になります
- エネルギー面での自立・分散型社会の実現も将来に向けての課題です。森林が 75% を占める丹波の地の利を生かして、集落・地区単位でバイオマス発電を中心とした再生可能エネルギーの導入を進めることが期待されています
- 環境・資源リスクへの対応が新たなビジネスや産業の創造を促す、すなわち、環境保全が経済振興・社会発展につながる仕組みを築いていくことが重要です。環境、経済、社会の好循環（Win-Win の関係）を実現する地域社会の構築が求められています



(出典：自治体排出量カルテ（環境省）)

図 丹波地域における温室効果ガス（CO2）排出量の推移



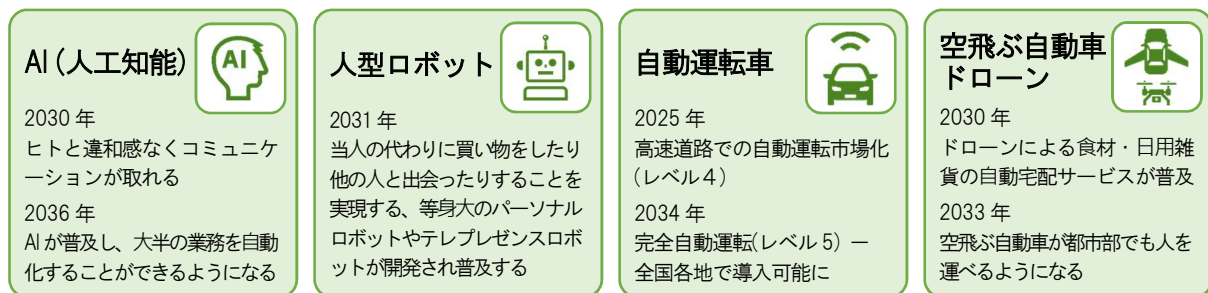
(出典：丹波篠山市、丹波市調べ)

図 丹波地域における一人あたりの家庭ゴミ排出量の推移

3 超スマート社会の到来

3-1 デジタル技術がもたらす社会変革

- デジタル技術の進歩によって、インターネット（IoT：Internet of Things）で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有される社会が到来します。その知識・情報を活用することで、新たな価値、イノベーションが生み出され、社会課題の解決が進むと期待されています。
- リアルタイムで情報が集積（ビッグデータ化）され、解析（AI（人工知能）の活用）されることで、生産・流通、都市空間・インフラ等の最適制御が可能になるといわれています。サービス面でも、必要なモノやサービスを、必要な人に、必要な時に、必要なだけ提供することが可能になると期待されています
- AI やロボット、自動走行車等の技術によって、人の可能性の広がる社会、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会が実現するといわれています。
- 人はアバター（分身）としての AI やロボットの活用により、ルーティンワーク（仕事・家事）から解放され、人間らしさ（自分らしさ）の追求に向け、創造的な活動に向かうことが予見されています



※ 記載されている年は、社会的実用時期（＝実現された技術が製品やサービス等として利用可能な状況となる時期）
 （「第11回科学技術予測調査」（2019）〔文部科学省科学技術・学術政策研究所〕を加筆・編集）

図1 主要スマート技術の将来予測

3-2 地域社会の新たな可能性

- デジタル技術によるサービス革新（DX：デジタル・トランスフォーメーション）により、人口減の地域社会でも、個人的、潜在的ニーズに対応する、きめ細かなサービスの提供の実現が可能になります。自動走行車等の出現によって、高齢者等も自由に移動できるようになります。
- 超スマート社会が到来し、地理的・時間的制約から解放されることで、大都市から離れ、人口減が進む多自然地域でも、居住地、就業地としてのポテンシャルが高まります。特に、二地域居住、多拠点居住する人も増え、多様な人材が地域に集まりやすくなります
- 居住地、滞在場所の選択にあたっては、生活の利便性よりもむしろ、各人の創造活動を支える場（創造都市・創造農村）としての可能性が重視されるようになります。地域では、ビジネス、アート、暮らしの各分野で創造的活動に取り組む人（クリエイター）たちが活動しやすい環境づくり（価値創発の風土づくり）が重要になります

- センサー技術、AI、ビッグデータの活用によって、地域社会の空間・ストック（森林・田畑・家屋等）管理やエネルギー供給等の最適化が図られるようになります。生産現場での省力化、自動化、無人化も進みます。
- 仮想空間を介して新しい人と人、人とモノとの関係性の構築が図られることで、地域社会を支える多様な担い手の確保が可能になると考えられています

表2 今後各分野で実現するスマート技術（～2035年）

分野	科学技術トピック	社会的実現時期
森林	木材の伐採・搬出・運材・加工の自動化技術の確立	2030
	野生動物の個体数管理のための効果的な捕獲技術及び革新的な獣害防止技術の確立	2031
	土砂災害等を未然に防ぐ森林管理技術の確立	2033
農業	人間を代替する農業ロボットの導入	2029
	農業の生産性、人手不足・担い手不足の解消を抜本的に改善するAI、IoT、ロボット等技術の確立—スマート（全自動）農業の実現	2031
食料	人工肉など人工食材をベースに、食品をオーダーメイドで製造（造形）する3Dフードプリンディング技術の確立	2028
	生産・流通・加工・消費を通じた完全循環型フードバリューチェーンの構築	2032
エネルギー	小都市(人口10万人未満)における100%再生エネルギーのスマートシティ化を実現する、スマートグリッド制御システムの構築	2033
	木質系バイオマス発電の経済性を向上させるための人工林循環生産システムの構築	2035
医療 介護	遠隔で、認知症などの治療や介護が可能になる超分散ホスピタルシステム（自宅、クリニック、拠点病院との地域ネットワーク）の確立—AI医療の実現	2030
	自立した生活が可能となる、高齢者や軽度障害者の認知機能や運動機能を支援するロボット機器の導入	2030
移動	超高齢社会において、高齢者が単独で安心してドアからドアの移動ができる、地区から広域に至るシームレスな交通システムの確立	2031

※ 実現された技術が製品やサービス等として利用可能な状況となる時期

（「第11回科学技術予測調査」（2019）〔文部科学省科学技術・学術政策研究所〕を加筆・編集）

4 人々の意識変化

4-1 生活意識の変化、ライフスタイルの変容

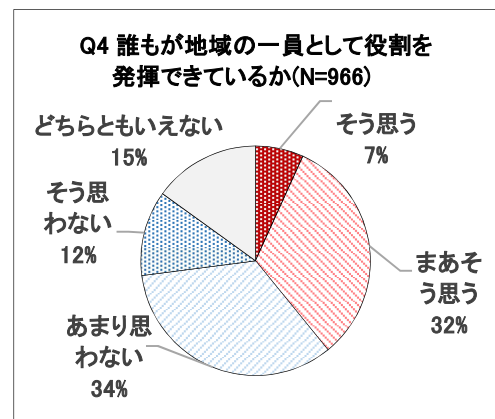
- 50年前の高度成長期、30年前のバブル期から、わたしたちの生活意識や価値観は大きく変わり、ライフスタイルも変容しつつあります。
- 結婚をめぐっては、「必ずしも結婚する必要はない」と考える人が増え、生涯未婚率は上昇し続けています。子どもも「もたなくてもよい」と考える人が多数を占めるようになっていきます。
- 働き方の意識をめぐっても変化が生じています。若い人の間では、就業選択にあたって生活を重視する人が増えています。雇用者にとって、仕事と生活の両立（ワークライフバランスの充実）が可能な就業環境の創出が課題です
- 男女の平等意識も高まりつつあります。夫の育児や家事への参加が当然視されるようになっていきます。教育でも、男女間での大学進学率の差は解消しつつあります
- 物の豊かさよりも心の豊かさが重視されるなか、モノ消費に代わって、コト消費や時間

消費への関心・ニーズが高まっています。また、健康志向の暮らしや環境に配慮したライフスタイルが注目を集めています。

- LGBT やシングルマザーといったマイノリティ（少数派）への配慮も、近年高まっています。外国人と接する機会が増えたこともあり、多文化共生の意識も芽生えはじめています
- NPO 法（非営利特定活動促進法）制定から四半世紀が経ち、市民セクターの拡大とともに、市民意識も育ってきました。自分の専門知識・技能を生かしたボランティア（プロボノ）や寄付・社会的投資により地域への支援を行おうとする人が増えています

4-2 暮らしやすい地域社会、チャレンジできる地域社会の実現

- 上記のような生活意識の変化、ライフスタイルの変容は、大都市部同様、多自然地域である丹波でも進んでいます。今後も、時間や場所にとらわれない暮らし方が普及・定着するなかで、丹波で住み、働き、活動する人たちの生活意識やライフスタイルはますます多様化していくことが予見されます。
- こうした多様化する人々の個性を尊重し、様々なライフスタイルの選択が可能な地域づくりを進めることが、地域の魅力向上につながります。デジタル技術も駆使しながら、可能な限り一人ひとりに寄り添ったサービスを実現することが期待されています。
- 一方で、住民や関係人口の多様性を地域の力に変えていくことも重要です。居住地、年齢、性別、国籍、障害の有無等に関わりなく、多様な人材が自らの知識や技能を生かして活躍することで、地域の問題解決能力は高まっていくと思われます。そしてそのためには、誰もがしごと（起業）や地域活動にチャレンジできる仕組みを築いていくことが必要になります（図参照）。



(出典：「丹波地域の今とこれからのに関するアンケート」)

図 アンケート調査結果

VI 将来像実現に向けたシナリオ・方向性

- ◇ 将来像の実現に向けて推進すべき取組の展開方向（シナリオ）を記載しています
- ◇ 展開方向毎に、将来像実現に向けた2030年初頭までの概ね向こう10年間の取組の方向性を明らかにしたうえで、「シンボル・プロジェクト」（重点事業：☆印）をはじめとする今後5年間で推進すべき取組を示しています

1 空間像—生活空間の再編・創造—

1-1 「森」の保全と活用—守り、活かす—

展開方向1 森・川・里の自然再生・活用

<取組の方向性>

- 災害に強い豊かな森を広げるため、緊急防災林のほか、針葉樹林と広葉樹林の混交林等の整備を推進します。獣害対策では、個体数管理・被害対策を進めるとともに、人と動物の緩衝地帯となる野生動物共生林の整備にあたります
- 丹波産木材の利用拡大に向け、原木供給体制の整備を進めるとともに、公共施設の木造木質化や県産材を使った木造住宅の普及促進を図ります。木質バイオマスの利用拡大にも取り組みます
- 身近な里山（森林）の保全・再生に向け、里山づくりの担い手拡大を図るとともに、多くの人が里山を訪れるよう、里山の憩いの場、学びの場、暮らしの場としての活用を促進します
- 源流域の生態系を守るため、生き物の生息環境に配慮した河川整備を行ないます。また、多彩な交流を育む、多様性のある親水空間づくりを進めます

<シンボル・プロジェクト>

☆ 森のシンボルプロジェクト—「アクティブ・フォレスト」プログラム—

目標：里山づくりの担い手数 300人(R8累計)／里山を訪れる人の数 年間1万人(R8)

・丹波の森づくりの次世代への継承を目的とした住民参加型の取組として推進。住民、サポーター、学校、企業など多様な主体が連携し、里山（森林）整備や森林管理、資源循環、希少生物保護、環境学習、もりびと育成等を進めます。里山の情報発信を強化し、そのみえる化を図ることで、里山に入る人を増やしていきます。

- －モデル団体の活動支援
- －関係人口の参加促進
- －里山づくり体験会の開催
- －たんばフットパス“里山・集落の道”の選定・整備 等



里山づくり体験会
(丹波市)

<推進すべき主な取組>

(災害に強い豊かな森づくり)

- ・緊急防災林の整備：間伐木を利用した土留工の整備 等
- ・里山防災林の整備：
危険木伐採や丸太柵工等の簡易防災施設の整備 等
- ・混交林の整備：高齢人工林を部分伐採し、広葉樹を植栽

(獣害対策)

- ・個体数管理・被害対策：有害捕獲・狩猟期間捕獲への報奨金、防護柵の設置 等
- ・野生動物共生林の整備：人と動物の棲み分けゾーンの整備 等

(林業振興・木材利用促進)

- ・生産体制整備：作業道開設、高性能林業用機械の導入 等
- ・地元産（県産）木材を利用した木造住宅の建設促進：
モデル住宅の普及啓発

(里山づくり)

- ・木の駅プロジェクトへの参加促進：
チェーンソー安全講習会、丸太切り出し作業体験会等の開催
- ・住民参加型森林整備：地域住民による森林整備や歩道設置等への助成
- ・企業の森づくり：企業による社会貢献としての植林や下刈り、除間伐等の活動

(自然豊かな川づくり)

- ・希少生物の保護：魚道の設置、ビオトープ（生物生息空間）の再生 等
- ・親水空間の整備：階段工、観察施設等の整備



野生動物共生林（丹波篠山市）



「丹波篠山の家」モデルハウス



畑川親水施設（丹波篠山市）

展開方向2 景観の保全—温かくて、懐かしい丹波の景観を残す—

<取組の方向性>

- 時代とともに都市構造や土地利用が変化するなかでも、日本の原風景ともいえる丹波らしい景観を守り、未来に残していくために、緑条例、景観条例等景観保全の枠組みを堅持し、その適切な運用を図ります
- 丹波らしい景観を楽しめるよう、桜つつみ回廊、たんば三街道（水分れ街道、丹波の森街道、デカンショ街道、川代恐竜街道）、里山・ため池等の修景整備や情報発信に取り組むとともに、景観をめぐるルート整備を行います
- 花に彩られたまちなか・集落景観の創造に向け、住民・地域主体の景観保全活動や花づくり活動等を支援していきます

<推進すべき主な取組>

- ・兵庫県緑条例による開発の規制誘導：秩序ある土地利用の促進
- ・伝統的建造物群保全地区、景観形成地区等の活動促進：人材育成、ルール策定支援
- ・桜つつみ回廊の再整備：桜の木の植換え、長寿命化、回廊の魅力発信

- ・ たんば三街道の美観形成：シンボル標柱の設置・改修、街道名標識の設置
- ・ 里山景観の保全：里山林の再生
- ・ ため池景観の魅力発信：ため池をめぐるガイドツアーの開催 等
- ・ 丹波チャレンジ200の整備：サイクリングルートの道路改修、案内標識設置 等
- ・ たんばフットパスの整備：里山・集落をめぐる道の選定、遊歩道の整備 等
- ・ ひょうごアドプトの推進：住民主体の街路管理の普及・支援
- ・ オープンガーデン、花祭り等の開催：住民主体の花づくり活動の普及・支援



福住地区の歴史的街並み
(丹波篠山市：伝建地区)



桜づみ回廊
(丹波市：佐治川)



丹波チャレンジ200
を疾走するサイクリスト

1-2 集落、まちの創生—居心地のよい「場」の創出—

展開方向3 集落保全の仕組み構築—未来へつなぐ集落資産—

<取組の方向性>

- 集落空間・資産を未来に引継ぎ、伝統的景観を守ることができるよう、家屋管理や農地集約化、里山保全などの仕組みの構築を進めます
- 農地や里山等の維持につながる地域での共同活動の継続・拡大を支援します。集落と関係人口のマッチングを進め、取組への都市住民や専門家等の参画も促進します
- 関係人口が参画しやすい開かれたコミュニティづくりに向け、集落運営の仕組み刷新を支援します。モデル・コミュニティでは、関係人口が電子市民として参画する仮想コミュニティの構築等を進めます
- 局地的な集中豪雨など災害の発生頻度が増している状況を踏まえ、集落の防災力向上に取り組みます。ため池改修など農業用施設の整備を計画的に推進するほか、管理者の育成などソフト面での減災対策も進めます

<シンボル・プロジェクト>

☆ 次世代コミュニティ・プロジェクト（「持続可能なコミュニティ」プログラム）

目標：モデル・コミュニティ数 10 地区 (R8 累計)

- ・モデル・コミュニティにおいて、集落、農地、里山の空間・ストック管理と集落運営の仕組み刷新を進めます。空間・ストックを有効活用し、新たな事業・サービスの創出にも取り組みます。関係人口等新たな担い手の発掘・育成に向け、仮想コミュニティの構築や新たなコミュニティ・ルールの形成を進めます。



交流拠点として再利用された
旧雲部小学校（丹波篠山市）

<推進すべき主な取組>

- ・ 空き家、遊休施設（公民館・旧小学校等）の維持管理：自治会・地域団体等による建屋改修、施設再利用・転用への支援
- ・ 農地管理主体の組織化：集落営農組織等の設立、法人化促進
- ・ 担い手への農地の集積・集約化：優良農地の確保（荒廃農地の再生）、農地の借受け・貸付けの促進
- ・ 生産基盤の維持管理体制再構築：地域の共同活動（農地維持、水路管理等）への支援
- ・ 農地のレベルアップ整備：農地の大区画化、用水路のパイプライン化 等
- ・ 多様な担い手による里山づくり：社会貢献活動としての企業の森づくりの拡大、木の駅プロジェクトへの支援
- ・ ため池の管理：計画的改修・廃止、雨水貯留の取組推進
- ・ ため池管理者の育成：講習会の開催、専門家による現地指導
- ・ 地域防災力の向上：自主防災組織の活動支援



空き家を活用した交流拠点
（「村の駅真南条」：丹波篠山市）



農地維持活動（水路の泥上げ）
（丹波市）

展開方向 4 エネルギーの自立分散供給—地産地消の実現—

<取組の方向性>

- エネルギー自給率 100%コミュニティの実現に向けて、小学校区等を単位としてバイオマス等の再生可能エネルギーの導入を促進するとともに、世帯単位での自家発電への支援も進めます
- バイオマス発電の拡大に向け、燃料の安定供給体制の構築に取り組むとともに、事業者、地域団体、NPO、市民の連携を進めます
- バイオマス利用の啓発・普及や省エネルギー運動に取り組むもりびとの活動を支援していきます

<シンボル・プロジェクト>

☆ 次世代コミュニティ・プロジェクト（「スマート・コミュニティ」プログラム）[再掲]

- ・ エネルギー面での自立分散型コミュニティの実現に向け、検討会を立ち上げ、地区・集落への再生可能（バイオマス）エネルギー導入に係る技術的、経済的検討にあたります



間伐材の搬入風景
（丹波市木の駅プロジェクト）

<推進すべき主な取組>

- ・ 再生可能エネルギーの普及促進：自治会、事業所等での太陽光発電施設等の導入支援
- ・ 自家発電の普及促進：家庭での蓄電池、エコ給湯供給器、発電設備の導入支援
木質バイオマス発電施設（丹波市）
- ・ バイオマス燃料の安定供給体制整備：燃料用木質チップの



集積場等の整備

- ・ 木の駅プロジェクトの推進：市民による間伐材伐採、残材収集等の活動への支援
- ・ 間伐材の利用促進：薪ストーブ、薪ボイラー設置への支援

展開方向5 次世代都市空間の創造—懐かしくも新しい、快適なまちへ—

<取組の方向性>

- まち（市街地）の歴史遺産の未来への継承をめざし、歴史的建築物、街並み景観の維持・保全、活用の仕組みの再構築を図ります
- 賑わいのあるまちの再生に向け、人々のふれあい、交流の場の整備を進めます。また、多世代が歩いて暮せるまちの実現に向け、生活サービスのまちなかへの集約を促進します
- 新しい暮らし方、働き方に対応した次世代都市の実現をめざし、まちなかで多拠点居住やテレワークなどの施設・拠点の整備を推進します。自動運転、遠隔医療、遠隔教育等の普及に向け、都市情報基盤の早期整備にあたります
- 自動運転等の技術進歩を踏まえ、2030年初頭における継ぎ目のない移動（交通）システムの確立をめざし、新技術の実証実験などにあたります

<シンボル・プロジェクト>

☆ **まちの拠点創造プロジェクト** 目標：構想策定地区数 2 地区 (R8)

- ・ 丹波地域の中心市街地（柏原地区等）において、まちの交流ゾーンとしての求心力向上に向け、多拠点居住やテレワーク等新たな暮らし方、働き方にも対応した複合的な都市機能整備を官民共同で推進します



柏原市街地遠景
(丹波の森公苑裏山からの遠望)

<推進すべき主な取組>

- ・ 伝統的建造物群保全地区、景観形成地区等の活動促進：人材育成、ルール策定支援
- ・ 古民家の再生支援：にぎわい・交流施設や創造拠点、次世代住宅への転換を促進
- ・ まちづくり会社、まちづくり協議会等の活動支援：次世代まちなかプランの策定や、チャレンジ・ショップ、交流施設等の整備を支援
- ・ 大学と地域の連携促進：都市空間の新しい利用方策等を共同で検討・提案
- ・ 情報通信基盤の整備：兵庫情報ハイウェイの活用促進、Local 5G の導入促進、データ連携基盤（都市OS）の検討
- ・ 自動運転、グリーン・スローモビリティの社会実験：新たな移手段の確保
- ・ 生活交通マース（MAAS）の導入：多様な移手段の探索・予約・決済を一元化



グリーンスローモビリティ
の実証実験（丹波篠山市）

2 社会経済像—新しい経済・雇用のしくみ創出—

2-1 新しい産業、事業が生まれ続ける価値創発の風土づくり

シナリオ6 農の持続化・効率化とフードバリューチェーンの構築

<取組の方向性>

- 人口減少下における農の持続可能性の向上に向け、経営、環境、人材等の側面から持続可能な営農環境の整備をめざします。経営面では、スマート農業による省力化、効率化、環境面では、農地の集積・集約化、人材面では、経営感覚に優れた担い手の育成、半農半X等への支援による多様な担い手の確保等を進めます
- スマート農業・林業が本格化する2030年代前半における無人(全自動化)農林業の実現をめざします。先端技術の実証実験を繰り返すととともに、集落・地区単位で運営体制を整備し、丹波の風土にあったスマート農林業(協議会方式(大規模)・シェアリング(中規模)・個別担い手(小規模))の確立を図ります
- 2030年頃を目標に、域内(及び近隣地域)において循環型フードバリューチェーン(食の価値連鎖)の仕組みを構築し、付加価値の高い製品の開発を促進します。それにより、富(所得)の域内循環と農林業の収益確保、食・農にかかわる多様なしごとの創造を図ります

<シンボル・プロジェクト>

☆ たんばスマート農林業特区プロジェクト

目標：丹波型スマート農業実施面積 500ha (R8)

- ・ブランド農産物、丹波産木材の生産・維持拡大に向け、効率化、省力・軽労化を進めるスマート技術の確立を図るとともに、技術活用の仕組みづくり(協議会の結成、規制緩和の活用等)を進め、域内へのスマート農林業の普及拡大をめざします
 - －地域連携型スマート農業シェアリングシステム(地域協議会)の構築
 - －センサーを活用した灌水支援システムの実証、ロボット除草機による作業軽労化
 - －ドローン防除の拡大、ドローン空撮データを活用した営農支援
 - －ドローン等スマート農業機械の導入支援



ドローンによる農薬散布
実演会(丹波市)

☆ たんばフードバレープロジェクト

目標：商品化された食加工品の数 10 (R8)

- ・域内・近隣地域を中心に、企画開発、生産、加工・流通、販売、飲食、観光部門等の事業者間の連携を促し、ブランド農産物の高付加価値化や新たな食加工品の開発・販売を進めます



食品メーカーと黒大豆卸売事業者
が共同開発した
「冷凍丹波篠山産丹波黒枝豆」

- －相談会の開催、六次化ステップアップ講座の開催、新商品等の試作・試行的販売支援
- －農商工連携ファンドの活用
- －ブランド農産物の情報発信、各種フェアの開催、食文化プロジェクトとの連携

☆ 食文化ツーリズム・プロジェクト [再掲]

- ・ブランド農産物の収穫体験ツアー、食加工品製造工程見学ツアーの催行

<推進すべき主な取組>

- ・地域農業の担い手育成：営農リーダーの育成や集落営農組織の組織化、新規就農者支援
- ・農地のフル活用推進：農地のレベルアップ整備に向けた協議の場づくり支援
- ・ほ場整備：農地の大区画化、用水路のパイプライン化 等
- ・農業水利施設の整備：水門、堰堤、用排水路、用排水機場等の機能維持・更新
- ・農業データ連携基盤の整備・活用：データを活用した農業の推進（農業者間でのデータ共有による地域全体の技術力底上げ・技能継承）、生産から加工・流通・消費までデータの相互利用が可能なスマートフードチェーンの創出
- ・農業経営の多角化、六次化：農産物加工、店舗、消費者への直接販売（EC サイト運営）、貸農園・体験農園、観光農園、農家民宿、農家レストラン等の経営 等



用水路をパイプライン化したほ場（丹波市）



農家民宿（丹波篠山市）

展開方向7 ツーリズムの新展開－多様化、地元化、仮想化－

<取組の方向性>

- 社会潮流や個人の嗜好の変化を踏まえ、‘分散・離散’、‘小規模’、‘多様性’を特徴とする、地域資源を活かした新たなツーリズム（マイクロ・ツーリズム、テーマ・ツーリズム、着地型観光）を地域主体、住民主導で進めます。
- それにより域内のツーリズムの幅を拡げ、いつでも何度でも来てもらえる通年型観光の目的地としての発展をめざします。また、将来のインバウンド需要なども見据え、ツーリズムの質の向上にも努めます
- 食の宝庫としての丹波の優位性を活かし、料理だけでなく、ホスピタリティ、景観、物語、雰囲気、しつらいなどから五感で土地の食文化、ライフスタイル、地域性を体感できるような食文化（ガストロノミー）ツーリズムの展開をめざします
- 森の豊かさを楽しめる丹波ならではの旅として、林業体験や森を使った遊び、スポーツ等を楽しめる森林（フォレスト）ツーリズムの展開を図ります
- 時間や場所にとらわれない働き方の普及とともに拡大が見込まれるワーケーション需要等に対応し、脱観光型、非観光型ツーリズム（テレワーク＋社会体験、ビジネス交流等）の推進を図ります

- 様々な固有の地域資源を組み合わせ、**丹波地域のブランド化**に取り組みます。周辺地域との間で様々なテーマ・ツーリズムにおいて**広域連携**を進め、新たな周遊ルート^⑧の形成を図ります。
- バーチャル・ツーリズム（仮想空間での疑似旅体験）など、**デジタル技術の活用**により、ツーリズムのサービスやコンテンツの付加価値向上をめざします

<シンボル・プロジェクト>

☆ **食文化ツーリズム・プロジェクト**

目標：食文化ツアーの造成件数 100 件 (R8)

- ・黒大豆などブランド製品の収穫体験など、丹波の食・食文化を体感できる多彩なコト体験プログラム(マイクロ・ツーリズム)の充実を図ります
- ・ゲストハウス、農家民宿等を、郷土料理とコト体験が楽しめる「たんばオーベルジュ」として一体的にプロモーションし、利用促進を図ります
- ・生産者と飲食・観光事業者等の連携により、新しい食材、料理、料理法の開発に乗り出すとともに、食にまつわるストーリーの発掘、発信にあたります



黒豆の収穫体験（丹波市）



地元食材を使った農家民宿の料理（丹波市）

☆ **たんば恐竜（DMO）構想推進プロジェクト**

目標：観光入込客数 100 万人 (R8)

- ・恐竜化石関連施設群が連なる篠山層群エリアを我が国有数の恐竜学習・アミューズメントゾーンとするため、体験・学習プログラムの開発、ツーリズムの造成、グッズの開発等に取り組みます。発信力強化に向け、事務局の法人化(DMO(Dinosaur Marketing Organization)化)、専門人材の登用、サポーターの拡大等を進めます



ちーたんの館（丹波市）



丹波観光ポータルサイト「ぶらり丹波路」



パラグライダー体験（丹波市青垣）

<推進すべき主な取組>

- ・観光情報の総合的発信：ポータルサイトの充実
- ・SNS を活用した市民発の情報発信：インスタグラム等への投稿募集
- ・コト体験プログラムの開発：メニューの拡大・多様化、市民によるツアー企画・催行支援
- ・丹波の気候・風土や地域資源を活かしたユニークなツーリズムの展開：丹波霧ツーリズム、水分れ域探索、巨木・奇岩めぐり、工芸・陶芸体験（丹波木綿、丹波布、丹波焼等）等
- ・多彩な森林・野外ツーリズムの推進：間伐体験、里山づくり活動、自然探検、野外生

- 活体験、エコツアー、トレッキング、パラグライダー、グランピング 等
- ・サイクルツーリズムの推進：たんばチャレンジ 200 におけるツアー開催
- ・ワーケーション施設の整備：情報通信基盤の強化、施設発着型ツアーの開発
- ・農村型 MICE の推進：オンラインを活用した複数集落でのイベント分散開催
- ・広域連携の推進：大丹波連携事業の展開（ドライブ・スタンプラリー等）
- ・ローカル・マース（MaaS）の導入：観光施設、交通手段等の予約・決済の一元化
- ・集客施設での仮想展示：VR（仮想現実）、AR（拡張現実）の導入 等
- ・AI 搭載の観光アプリ開発：疑似旅体験を提供、目的地選択・プラン作成を支援、現地ではガイドとして機能、施設・店舗等の混雑情報をリアルタイムで提供

展開方向 8 製品・サービスの高付加価値化ー世界市場との直結ー

<取組の方向性>

- 域内製造・サービス業では、ICT をはじめ域内産業との連携のもと、付加価値の高い製品・サービスの開発をめざします。オンリーワンの製品については、世界市場への挑戦を後押しします
- 域内商業に関しては、まちづくりと一体となった振興策を推進するとともに、食文化ツーリズムとの連携を促進します。
- 日本遺産、恐竜化石等丹波固有の地域資源を活かしつつ、地域性、ストーリー性をもった商品・サービスの開発に取り組んでいきます

<シンボル・プロジェクト>

☆ たんばフードバレープロジェクト [再掲]

- ・ブランド農産物を原材料とするプレミアム食品・食加工品の開発・販売 等

☆ 食文化ツーリズム・プロジェクト [再掲]

- ・商店・商店街と連携した食べ歩きフェアの開催、食のコト体験ツーリズムの展開 等

☆ シリ丹バレープロジェクト [再掲]

- ・地域中核企業を中心とした企業連携の推進、DX 化による製品開発への支援 等

☆ たんば恐竜（DMO）構想推進プロジェクト [再掲]

- ・新たな恐竜グッズの開発・販売 等

<推進すべき主な取組>

- ・優れた製品に対する表彰及び PR 支援：丹波すぐれもの大賞
- ・地域産業の人材確保支援：高校生を対象とした就職説明会、現地見学会の開催、大学生等を対象とした企業見学ツアーの開催
- ・地域中核企業のグローバル展開支援：国内外の産業展等への出展支援
- ・まちづくりを一体となったイベントの開催：アートイベント、マルシェ等の開催



平成 29 年度丹波ものづくり大賞
LED 投光器 モジュール
（パナソニックインダストリアル株式会社）

- ・商店街の活性化：町屋（古民家）活用による新規店舗の出店促進
- ・チャンレン・ショップの整備：町屋（古民家）を改修し、若手商業者に期間限定で貸し出し

展開方向9 シリ丹バレー構想の推進－エコシステム創出、DX化推進－

<取組の方向性>

- 地域発イノベーションの創出をめざし、シリ丹バレー構想を推進します
- 構想の実現に向け、民間企業（含金融機関）、経済団体（商工会等）、大学、行政、市民・NPO等からなる産学官民のネットワーク形成を進め、地域イノベーション・エコシステム*の構築を図ります
 ※ 地域の様々な主体が結びつき、アイデア、情報、知識、技術等の交換を図りながら、協業（協働）していくことで、イノベーションが創発的（連鎖的）に生み出されるシステム
- 構想では、だれもが起業・創業しやすい環境の創出をめざすとともに、ICTを活用した地域産業の生産性向上に挑みます。優れた人材・技術の域内への流入や外部からの投資の促進も図ります
- また、地域課題の解決に資するビジネス（スマート農業等）や地域資源を活かしたビジネス（恐竜 DMO 等）の立ち上げを促進します
- 構想の推進を通じて、イノベーション創出・事業創造に向けた新しい交流、情報交換、知識共有の場と機会を創りだしていきます。農林業、地域産業、ICT 企業間の連携や移住者（事業者）と地域中核企業の交流、起業家と投資家・機関とのマッチングなどを進めていきます
- 新しいビジネス空間・場の創出も進めます。空き家・廃校等の遊休施設や宿泊施設（農家民宿、ゲストハウス等）をコワーキングスペースやシェアオフィス、ワーケーション拠点として活用します

<シンボル・プロジェクト>

☆ シリ丹バレープロジェクト（エコシステム創出プログラム）

目標：ネットワークへの参画事業者・団体数：200（R8）

- ・シリ丹バレー構想の実現に向け、シリ丹バレー協議会の設立や人材バンク（メンター登録制度）の創設等を通じて産官学民のネットワークの形成を図るとともに、専門家・専門機関の指導・助言のもと地域産業のDX化を推進します



シリ丹バレー
キックオフ・ミーティング
(2022年1月)

<推進すべき主な取組>

- ・産業支援コーディネーターの育成・登用：産業支援機関等との連携を促進
- ・AI・IoT・ロボット技術の導入促進：技術者・専門家の派遣、現場指導
- ・産業展等への参加：構成企業で共同出展、シリ丹バレーのPR

- ・ スマート技術の社会実装支援：地域内で社会実験のフィールドを提供
- ・ 兵庫情報ハイウェイの活用：域内中小企業、事業者による利用促進

2-2 柔軟な働き方が可能な社会の形成

展開方向9 シリ丹バレー構想の推進—起業・事業承継支援—

<取組の方向性>

- 域内外を問わず、誰もが起業しやすい環境づくりを進めます。起業志望者に対し総合的な支援を提供するほか、起業経験者が起業志望者をサポートする体制の確立を図ります
- 経営者の高齢化が進むなか、廃業による雇用や技術の喪失を防ぎ、世代交代等を契機とした成長を実現するため、伝統産業、老舗、農林業をはじめ様々な分野で事業承継を推進します。経験・スキルを有し、意欲に富んだ人材（移住者等）、事業体とのマッチングを進めます

<シンボル・プロジェクト>

☆ シリ丹バレープロジェクト（起業支援プログラム）

目標：スマート技術や遊休資産を活用した起業数 12 件（R8）

- ・ 起業志望者に対しノウハウ習得や資金調達等の面で支援を行なうとともに、ネットワークを形成し、起業志望者・起業家間の交流・連携を促進します。新たな起業スペースの発掘にも取り組みます。



廃校舎のオフィスで働く
IT 起業家
(旧福住小学校：丹波篠山市)

- －女性起業家スクールの開講、女性起業家ネットワークの活動支援
- －起業家の資金調達（クラウド・ファンディング組成等）や法人設立にあたっての支援
- －空き家・廃校舎、ゲストハウス等のコワーキングスペース等への改修や情報通信環境整備への支援

<推進すべき主な取組>

- ・ 県内大学等と連携した起業家の育成：オンライン講座の開講 等
- ・ 起業・創業時の金融支援：内外金融機関による投資、低利融資
- ・ 小さな企業立地の推進：空き家、廃校舎等へのオフィス立地の促進
- ・ 地域後継者人材バンクの設立：事業創業・継承をめざす人材の登録制度の立ち上げ

展開方向10 多様なワークスタイルの創出

<取組の方向性>

- 若年層等を対象に農林業、地域産業の現場での就業体験機会（インターンシップ等）を拡大する一方で、人手不足解消に向け組織・地域間での人材の共有化、相互利用を

促進していきます

- 地域で需要のある多種多様な小口のしごとのマッチングを促進し、柔軟な働き方を応援します
- 地域内のしごとに対する副業人材（週末起業者等）の発掘・活用を進めます。人材を内外に公募し、各分野で優れた専門人材の確保を図ります

<シンボル・プロジェクト>

☆ たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト [再掲]

- ・お試し就業（インターンシップ）の斡旋

☆ 次世代コミュニティ・プロジェクト（持続可能なコミュニティ・プログラム） [再掲]

- ・まちづくり協議会の運營業務等に対する副業人材の公募

<推進すべき主な取組>

- ・しごと体験ツアーの実施：
（お試し居住等とともに）短期の職業体験の機会提供
- ・単位認定型インターンシップの普及拡大：
大学生に現場体験、地域体験の機会提供
- ・特定地域づくり事業協同組合*の設立支援：
安定的な雇用環境の創出と農林業、商工業等の地域産業の担い手確保



しごと体験
（丹波篠山市福住地区）

※季節毎の労働需要等に応じて複数の仕事を組み合わせ、組合員に年間を通じた仕事を創出することを目的に設置される組合制度（令和2年6月法施行）

- ・地域限定のクラウド・ソーシングの仕組み構築：小口のしごとのマッチング
- ・副業情報の発信：地域内の副業人材求人情報を一括オンライン掲示

展開方向 11 多彩な食農人材の集積促進

<取組の方向性>

- 農や食、スローフードライフに関心のある層に対して、コト体験プログラムや就業体験等を通して丹波における農のある暮らしの魅力を訴求します。それにより、就農への間口を広げていきます
- 他の仕事に従事しながらも、個々人のニーズに応じて、多様な農のある暮らし（半農半X）が実現できるよう伴走型支援を実施します
- 農の多様化とともに、農、食をめぐる異能の人材の流入を促し、食材の供給基地から新たな調理法や料理を生み出す食文化（ガストロノミー）の発信拠点への転換をめざします

<シンボル・プロジェクト>

☆ たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト [再掲]

- ・農業体験ツアーの催行

☆ たんばフードバレープロジェクト [再掲]

- ・多様な食農人材の公募

☆ 食文化ツーリズム・プロジェクト [再掲]

- ・ブランド農産物の収穫体験ツアーの催行

<推進すべき主な取組>

- ・農村ボランティアの募集、就農体験ツアーの実施：
農作業体験、農村生活体験（農泊）の機会提供
- ・生きがい農業への支援：市民農園の貸し出し
- ・研修プログラムの提供：
専門機関での研修（農業技術、農業経営のノウハウ習得の機会提供）、農業法人等での実地研修（インターン）
- ・ハード・資金支援：
農地、農機具・施設の斡旋、営農資金の相談
- ・定着支援：地元農家や若手農業者との交流促進、各種生活支援
- ・農業法人への就職斡旋：
- ・大学・専門学校との食の連携：県内大学栄養系学部・学科、調理専門学校の学生を対象とした体験・交流プログラムの実施、教員との共同研究
- ・飲食事業者への場の提供（チャレンジ・ショップ開設）：
若手食人材を対象に期間限定での出店を支援
- ・ファムトリップの実施：域外の料理研究家、飲食事業者等を対象とした現地視察会・交流会の開催



農業体験
(丹波篠山市)



全国から新規就農希望者を
受け入れている
丹波市立農（みのり）の学校



チャレンジ・ショップ
「あっとかいばら」

3 人間像—新たな人材、つながり、コミュニティの出現—

3-1 創造的人材の育成・活用と地域文化力の向上

展開方向 11 多彩な食農人材の集積促進 [再掲]

展開方向 12 もりびと（担い手）の育成・発掘

<取組の方向性>

- 里山づくりなどの地域活動や地域資源を活かした活性化の取組において次世代の担い手づくりを進めます。若い世代の担い手の育成にあたるほか、関係人口のなかから積極的に担い手を発掘・登用していきます
- デジタル技術の活用による社会課題の解決に向け、広く一般からアイデア、知恵、技術を募るオープン・イノベーションの仕組みを導入し、市民イノベーターの参画を促します

<シンボル・プロジェクト>

☆ シリ丹バレープロジェクト（起業支援プログラム）[再掲]

- ・オープン・イノベーションの仕組みづくり

☆ たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト [再掲]

- ・関係人口の当事者化（まちづくり協議会・自治振興協議会活動への参画促進 等）

<推進すべき主な取組>

- ・丹波の森大学・丹波OB大学・大学院の開講：
もりびとの養成
- ・里山づくり等の地域活動：もりびとによる実践活動の展開
- ・もりびとによる活動の組織化推進：
中間組織等による法人化（NPO 等）支援
- ・大学生による地域貢献活動：大学生と地域の交流拡大、大学生の関係人口化



丹波の森大学 講義風景

展開方向 13 ソーシャル・インクルージョンの推進—全員活躍型社会の実現—

<取組の方向性>

- 年齢、性別、国籍、障がいの有無等に関わりなく、すべての人を社会の一員として温かく包み込み、互いに支え合いながら共に生きる包摂型社会（ソーシャル・インクルージョン）の実現をめざします。誰もが「居場所」を見出せる地域社会が目標です
- すべての人が自らの経験や能力を活かして、地域社会に能動的に参画できる仕組みを築いていきます。地域社会に関わる人々の個性、多様性（ダイバーシティ）を積極的に活かすことで、地域力（問題解決能力）の向上を図ります
- 全員活躍型社会をめざして、ユニバーサル・デザインの地域づくりをさらに推進します。だれもが身体にあまり負担をかけずとも、仕事や作業をすることができるよ

う、スマート技術（ロボット、自動走行車等）を積極的に活用していきます

<シンボル・プロジェクト>

☆ **次世代コミュニティ・プロジェクト**（「スマート・コミュニティ」プログラム）〔再掲〕

・スマート技術の導入による仕事・作業の省力化・自動化促進

☆ **次世代コミュニティ・プロジェクト**（「持続可能なコミュニティ」プログラム）〔再掲〕

・コミュニティ・ルールの刷新により多様な人材が地域社会に関与

☆ **シリ丹バレープロジェクト**（起業支援プログラム）

・女性起業家の活躍促進

<推進すべき主な取組>

・福祉ボランティアの育成：高齢者、障害者、乳幼児・児童への支援の輪の拡大、
点訳・音訳、手話通訳、傾聴ボランティア等の養成

・地域社会での男女共同参画推進：

自治会、まちづくり協議会等における女性の積極登用

・高齢者雇用の促進：年齢制限の撤廃

・農福連携の推進：障害者の居場所づくり

・公共施設、まちのユニバーサル化：

より安全で便利、快適に活動し移動できる質の高いまちづくりの推進（段差解消、多言語表記案内板の設置 等）



女性のためのスキルアップセミナー

展開方向 14 創造都市・創造農村の形成—文化の発信力強化—

<取組の方向性>

- まちなかエリア等において古民家等のリノベーションにより文化創造活動の拠点形成を図るとともに、クリエイター相互の交流を促進することで、地域に根ざしつつも、時代に相応しい新たな文化、ライフスタイルの発信をめざします
- 集落等において伝統文化、民俗芸能、祭礼の継承を図る仕組みづくりを進めるとともに、内外の人が集落文化を体感できる機会を提供し、集落の文化的価値を内外に広く発信します
- 丹波の森国際音楽祭シューベルティアーデたんばをはじめ、丹波の森づくりのなかで培ってきた芸術文化活動の継承・発展を図ります

<シンボル・プロジェクト>

☆ **森のシンボルプロジェクト**（集落文化体感プログラム）

目標：文化の発信に取り組んだ集落数：20 集落（R8）

- ・集落文化の継承・発展に向け集落・地区間の連携を促進します
- ・集落文化への理解を深めるため、子どもたち向けの体験プログラムや、関係人口等を対象としたコト体験ツーリズム、イ



集落の山車（丹波篠山市）

ンターンシップなどを実施します

☆ **次世代コミュニティ・プロジェクト**（「持続可能なコミュニティ」プログラム）[再掲]

- ・集落の文化、祭礼の継承に関係人口が参加する仕組みづくりの推進

☆ **たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト** [再掲]

- ・関係人口が集落文化を体験できる機会の創出

☆ **まちなか拠点創造プロジェクト** [再掲]

- ・古民家等をリノベーションし、住民、クリエイター、アーティストの創造的活動の場（アトリエ、ミニシアター等）として活用



丹波篠山・まちなみアートフェスティバル

<推進すべき主な取組>

- ・芸術文化施設の整備：ホール・博物館等の改修、機能更新・向上
- ・芸術文化活動の継承・発展：シューベルティアード丹波等文化事業の運営支援 等
- ・アーティスト・クリエイターの育成支援：発表・展示の場・機会の提供
- ・伝統技術の継承：丹波木綿、炭焼き、檜皮葺き等の技術を伝承する人材の育成支援

展開方向 15 グローバル教育、国際理解教育の実践—世界との連携—

<取組の方向性>

- **丹波の森大学のオープン化、グローバル化**を推進します。丹波ならではの講座をオンラインで海外からも受講可能にするとともに、講師陣に海外の専門家、研究者を加え、少子・高齢化等世界共通の地域課題の解決に向けたアクティブ・ラーニングを行います
- 地域社会でも外国人コミュニティと連携して、**多文化共生の取組を推進**し、相互理解を促進します
- 丹波の森づくりで進めてきた**ウィーンの森との交流や海外姉妹都市との交流を継続・発展**させることで、国際理解を促進するとともに、地域の活性化を図ります

<推進すべき主な取組>

- ・丹波の森大学の改編：丹波学講座の国際化（森づくり、有機農法、古民家再生等）、グローバル専攻コースの開設（外国人受講生の募集、外国人講師の採用） 等
- ・国際理解教育の推進：語学講座、多文化共生講座、日本語教室、子どもの学習支援教室、交流会等の開催、外国人の地域活動への参画促進
- ・姉妹都市等との国際交流の深化：国際人材育成に向けた青少年の相互交流拡大、環境問題等共通課題の解決に向けた連携の促進 等



ウィーンの森親善訪問団

展開方向 16 キッズ・ファーストプログラムの展開

<取組の方向性>

- 子どもたちが自然のなかでの生き物とのふれあいや遊びを通して、感性を磨き、生きる力やふるさと意識を育むことのできる場や機会を設けます
- 子どもたちが地域の歴史文化、環境、農林業、地場産業、伝統芸能などを現場で自ら学ぶことができるように、様々なこどもコト体験プログラムを地域全体で開発、実践していきます

<シンボル・プロジェクト>

☆ たんばユース躍動プロジェクト

目標：プログラムを修了した青少年の数 100 人 (R8 累計)

- ・子どもたちが縄文時代の自給自足の暮らしや文化を体験し、生きる力を学ぶ「丹波縄文の森塾」のアドバンスドコースとして創設します
- ・中高生等を対象に、自然体験を通じ自然とともに暮らしてきた先人の知恵やスキルを学び、ふるさとの風土への理解を深めることのできるプログラムを開発します
- ・プログラムを修了した中高生は、子どもたちの自然体験学習、ふるさと学習のチューターとしての役割を担います



「たんば子ども塾」での生き物採集
—高校生が講師役に—

<推進すべき主な取組>

- ・自然体験学習の推進：環境学習、里山整備、希少生物保護、ふるさと学習等の取組と一体となって実施
- ・指導者（もりびと）、学習支援ボランティアの育成：長期計画で育成、世代交代を促進
- ・体験空間の整備：里山・源流域等でモデルフィールド・コースを設定し、場を整備
- ・ふるさと学習の推進：子どもたちによる食文化、郷土料理、地産地消等の学習、農業体験、しごと体験の実施、企業人・起業家等との交流、まち・集落の魅力（自慢）の発見・発信 等

3-2 人と人のつながり拡大と新たなコミュニティ形成

展開方向 17 関係人口の拡大+移住・環流の促進

<取組の方向性>

- 担い手（当事者）として集落運営、森づくり等に関わる関係人口の拡大に向け、ビジターをゲストからホストへと誘う仕かけづくりを進めます
- 関係人口の滞在、二地域居住、移住を促進するため、生活に必要なモノ・サービスをシェアできる仕組み（シェアリング・エコノミー）を整備するとともに、新たな生

業を興す人への起業支援や半農半 X を志向する人等へのしごとのマッチングを強化します

- 移住・還流の促進に向け、移住者の生の声、体感情報の発信を強化します。特に、移住希望者が増えつつある若年層・子育て世代が必要とする生活・しごと情報の発信拡大に努めます。移住者自らが丹波の魅力を発信することで、新たな移住者が来る、いわゆる「人が人を呼ぶ」好循環の流れの創出をめざします
- 情報発信にあたっては、自然や農とつながった暮らしを基本としつつ、次世代社会（超スマート社会等）に適合したライフスタイルや個性的なライフスタイルの実現が可能である「たんば暮らし」の価値を再発信します。また、域内の集落の多様性に配慮し、集落・地区単位のきめ細かな情報発信にも努めます
- 移住・還流対策を地域政策の柱に位置づけ、観光、住宅、産業振興等の施策と連携した総合対策として展開していきます
- 移住・還流対策では、単に移住者数の増加だけでなく、担い手となって地域活動や地域産業を支える一員の拡大（「人の誘致」）を図り、数・質の両面から移住・還流対策を推進します。移住・還流対策を通して地域の元気づくり、地域活動総量の拡大をめざします

<シンボル・プロジェクト>

☆ たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト

目標：市の窓口を介して移住した人の数 1000 人 (R8 累計)

- ・たんば暮らしの多様性、可能性をアピールするため、集落・地区単位の移住情報の発信を進めます。集落・地区のまちづくり施設やゲストハウス、農家民宿等を情報・交流拠点、しごと体験・農業体験ツアーの発着基地（集落見学ハブ）に位置づけ、その活動を後押しします。
- ・集落・地区で滞在（定住）しやすい環境づくりとして、家屋、生活物資・サービス、移動手段等をシェアできる仕組みの構築を支援します
- ・地域の担い手の創出に向け、「ジョブ型移住」を推進します。移住希望者一人ひとりのニーズに応じて、しごと体験（ボランティア、インターン）から副業・兼業、雇用就業、起業・継業まで、きめ細かく地域のしごと情報を提供し、マッチングを進めます

☆ シリ丹バレープロジェクト（起業支援プログラム）[再掲]

<推進すべき主な取組>

- ・移住情報ポータルサイトの整備：生活（住宅・子育て・教育等）情報・しごと情報の一元的発信
- ・移住相談体制の整備：対面・オンライン個別相談、大都市部・地元での相談会開催、体験ツアーの企画・実施 等
- ・移住者へのアンバサダー委嘱：移住情報の発信や移住プロモーション、新規移住者のフォローアップ等への協力を要請



オンライン移住相談（丹波市）

- ・お試し滞在・居住の推進：滞在施設の整備、生活体験、しごと体験の機会提供
- ・空き屋バンク、農地バンクの運営：移住者が利活用可能な空き家、農地の発掘、提供
- ・移住者と地元の人との交流会の開催：地域コミュニティへの理解促進、新しいネットワークの構築、移住者の定着促進
- ・地域おこし協力隊の定住促進：起業支援、雇用就業の斡旋
- ・地元企業等のジョブ型雇用*支援：企業等が必要とするスキル・知識を有する人材を公募し、マッチング

※ 職務内容（ジョブ）を明確にして、必要なスキル・知識を備えた人材を雇用する制度

- ・ふるさと教育の推進：将来の還流促進に向け、子どもたちが地域の文化、産業を知る機会を創出



たんば暮らしお試し滞在
(丹波篠山市)



移住者と地元の交流会
(丹波市)

展開方向 18 次世代コミュニティの形成

<取組の方向性>

- 最先端のデジタル技術を活用して、高齢者の介護や子どもの見守りの新たなシステム構築や避難誘導情報のリアルタイムでの発信・共有などを進め、人と技術の力で安全安心コミュニティの形成をめざします
- 高齢者等の移動の円滑化に向け、グリーン・スローモビリティや自動運転等の実証実験に取り組み、各集落・地区に見合った次世代交通のあり方を検討します。デマンド型タクシーなどに生活交通マース（MaaS）のシステム導入も促します
- 再生可能エネルギーの導入、蓄電施設の整備等により、コミュニティ単位でのエネルギーの自給自足をめざします
- 地域、地区単位で、空間や家屋、車などのモノや人（スキル・サービス）等の資源を共有し、相互利用を図り、生活の質の向上を実現するシェアリングエコノミーの仕組み構築を進めます

<シンボル・プロジェクト>

☆ 次世代コミュニティ・プロジェクト（「スマート・コミュニティ」プログラム）

- ・暮らしやすい地域社会の実現に向けたスマート技術導入のあり方について検討会を立ち上げ調査研究を進めます。暮らしに直結する「安全・安心」、「移動支援」、「エネルギー自立」、「買い物支援」等をテーマに検討にあたります。
- ・検討会での提案をもとに、モデル・コミュニティでスマート技術の実証実験を行い、技術導入の可能性、効果を探ります

☆ 次世代コミュニティ・プロジェクト（「持続可能なコミュニティ」プログラム）[再掲]

☆ たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト [再掲]

- ・集落・地区でのシェアハウス事業、カー・バイクシェア事業の展開
- ・関係人口案内所との連携によるクラウド・ソーシング*事業の展開（集落が関係人口の知識・スキルを必要なときに必要なだけ利用可能な仕組みの構築）

※インターネットを通じて、不特定多数の人に業務のアウトソーシングを行うこと

☆ **まちの拠点創造プロジェクト** [再掲]

- ・まちなかでの自動運転、グリーン・スローモビリティの社会実験

<推進すべき主な取組>

- ・IoT デバイス（カメラ・センサー等）による見守りシステムの構築：
子どもや高齢者の位置情報を家族に提供
- ・災害・避難情報のプッシュ通知：被害等の状況をリアルタイムで収集・分析・可視化し、避難情報等を瞬時に通知
- ・アシストスーツ（生活支援ロボット）の普及促進：
農業、建築・土木、介護等の現場における作業軽減、高齢者の移動の負担軽減
- ・オンライン診療の利用促進：移動診療車の活用、オンライン診療による処方薬をドローンで患者に配送
- ・客貨混載バスの運行：交通空白地帯の解消、移動の利便性向上
- ・ドローンの実証実験：まちなかから山間集落への物資搬送
- ・空飛ぶ自動車（電動垂直離着陸機）の試験飛行：
離発場の選定・整備、飛行ルート・空域の設定
- ・スマート店舗の試験営業：無人決済、遠隔接客での運営
- ・地域アプリの開発：地域情報の発信手段であるとともに、シェアリング・エコノミーや生活 MaaS の利用手段（インターフェース）となるアプリの開発



介護現場での
アシストスーツの活用



山間部での空飛ぶ自動車による
移動イメージ（経済産業省 HP）

Ⅶ 新ビジョンの推進に向けて

- ◇ 新ビジョンで示した将来像やシナリオの実現に向けては、実効性ある推進体制・枠組みを築くことが重要になります
- 丹波では当初ビジョン策定後の 20 年の間に、各分野で新たな担い手が現われ、様々な団体が設立されてきました、また、大学と地域の連携も進み、丹波で活動する域外の人（関係人口）の数も拡大しつつあります。
- こうした現状を踏まえると、各分野で活躍する内外の組織や人材をゆるやかにつなぐ形で新ビジョンの推進組織（「プラットフォーム TAMBA」（仮称））を結成することが適切と考えます。
- プラットフォームは、新ビジョンの実現に向けた共創の仕組み、すなわち、様々な主体が新たな価値創造に共に取り組むための枠組みです。それは、域内の市民・地域団体、事業者・産業界、教育機関、行政等（産官学民）の力を結集するだけでなく、関係人口等域外の主体（個人・組織）との結びつきを強化する役割を担います。また、プラットフォームでは、様々な人が地域づくりに参画しやすいように地域の仮想コミュニティ化を推進し、参画への間口の拡大・多様化を図ります

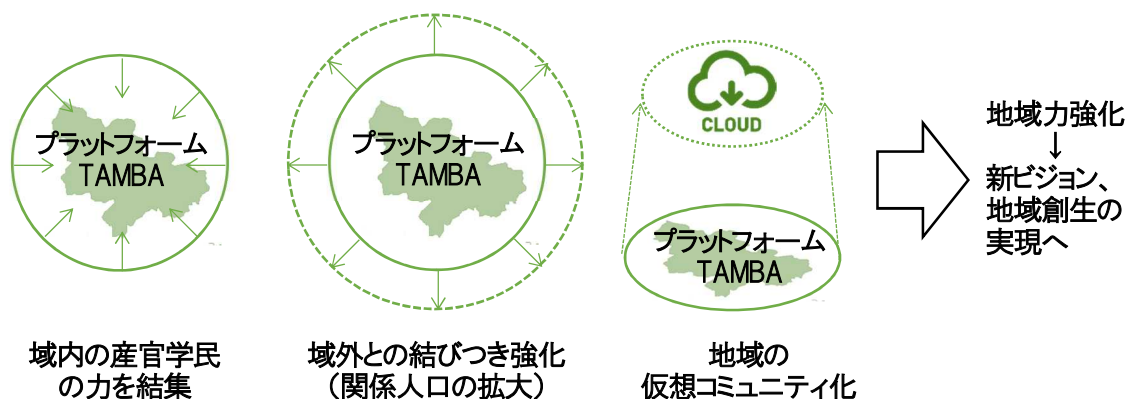


図 地域力強化に向けたプラットフォーム TAMBA（仮称）の役割

- プラットフォームは、各分野のネットワークの代表（市民（もりびと）、地域団体、産業界等）と若者代表、学識者、行政等で構成され、これまで地域ビジョン委員会が担ってきたビジョンのフォローアップ（点検、評価・検証）やコーディネート機能を担います。また、ビジョンの実施計画的な役割を果たす地域創生戦略（計画期間 5 年間）の策定・推進機関ともなります。
- プラットフォームでは、シンボルプロジェクト毎にその推進を図る「プロジェクトチーム」（仮称）を結成します。既にプロジェクト関連の組織・ネットワークが存在（丹波地域恐竜化石エコミュージアム推進協議会、シリ丹バレー協議会等）する場合は、それを母体にチームを編成します。また、チーム編成にあたっては、プロジェクト推進上の

課題解決に貢献できる人材を広く募ります。プロジェクトチーム等に多彩な人材を呼び込めるよう、関係人口等が活動しやすい環境づくりを進めます。なお、プロジェクトチームのメンバーの代表も、プラットフォームに参画することを想定しています

- また、次代を担う若者による「たんばユースチーム」(仮称)を結成します。ユースチームは、丹波で暮らす人、働く人、活動する人、出身者らで構成されます。ユースチームでは、将来に向けた提案をはじめ、シンボルプロジェクト等事業の推進に資するアイデアの提供、情報発信、ネットワークの形成など様々な役割を担います。ユースチームのメンバーには、プラットフォームやプロジェクトチームの一員としての活動も期待されています
- 「たんばユースチーム」の活動と地域における青少年を対象とした様々な体験学習、ふるさと学習、青少年事業との連携を推進します。ユースチームを体験学習等で学んだ青少年の出口、すなわち提案・実践の場として組織化します。一方、ユースチームのメンバーは、体験学習等の場にチューター、サポーターとして参加し、活動を盛り上げていく役割を担います。また、メンバーは、将来地域での体験学習や丹波の森づくりの活動のリーダー(もりびと)になることも期待されています

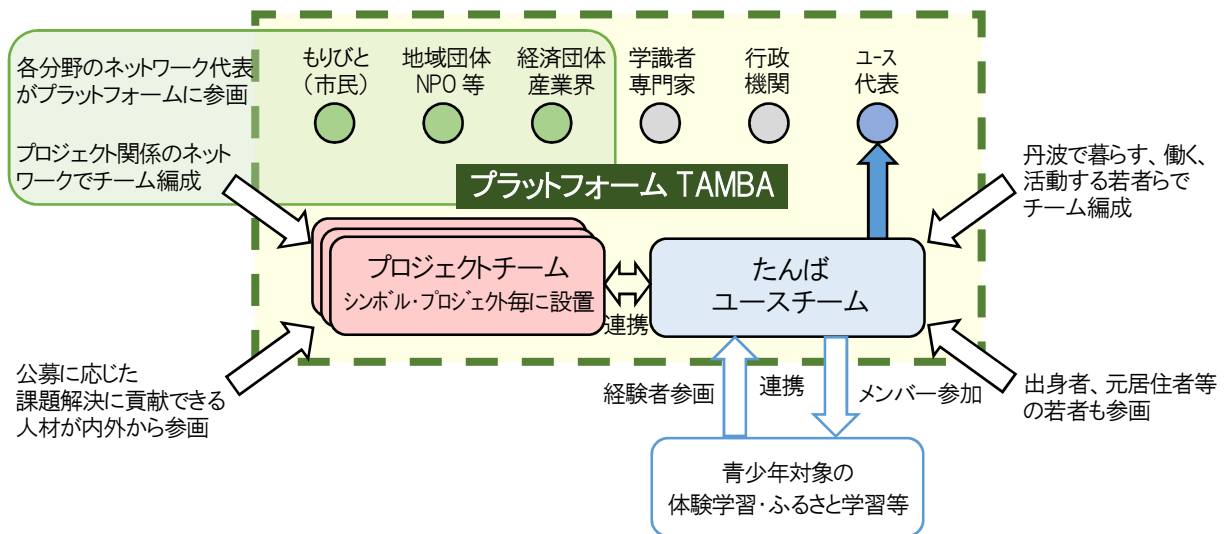


図 推進体制のイメージ